

論 説

マキアヴェッリ諸作品の連関 ——リーダー像を中心に——

笹 倉 秀 夫

はじめに

第1章 『カストルッチョ＝カストラカーニ』——軍事リーダーの具体像

第2章 『戦争の技術』——リーダーはどう戦うか

- 1 市民軍重視・反傭兵
- 2 訓練と規律化
- 3 戦場におけるリーダーの知と徳
 - (1) 統率力
 - (2) 指揮官のリアルな思考・賢明さ
 - (3) 策略
 - (4) 道徳・正義の尊重

第3章 『君主論』——君主のモデルは誰だったか (以上本号)

第4章 『ディスコルシ』——前章までに扱わなかった重要論点を軸に

- 1 マキアヴェッリは君主主義者か共和主義者か
- 2 民衆観・自由な国の民衆讃美
- 3 リーダー論
 - (1) リーダーの重要性
 - (2) リーダーのモデル——キュロスとスキピオ
 - (3) リーダーの厳格さと人間味
 - (4) 軍事・政治の闘い方
 - (5) 僭主（独裁者）嫌悪

4 法の重視

5 結び

第5章 西洋古代・中世の戦術論——マキアヴェッリ思想の土壌・先駆者

- 1 クセノポン

2 早法 93 卷 1 号 (2017)

- (1) 部下の忠誠心をかちとるには
- (2) 策略

2 フロンティヌス

- (1) 指揮官のリアルな認識・賢明さ
- (2) 紀律
- (3) 策略
- (4) 道徳・正義の尊重
- (5) 人間味

3 ウェゲティウス

- (1) 指揮官のリアルな思考・賢明さ
- (2) 紀律・訓練
- (3) 策略
- (4) 一般命題

4 中世の戦術論——古代の影響下での展開

- (1) オノレ＝ボネ
- (2) クリスティーヌ＝ド＝ピザン

全体の結び

はじめに

本稿の課題は、次の6点にある。

第一に、マキアヴェッリが、クセノポン、リウィウス、フロンティヌス、ウェゲティウスら古代ギリシャ人・ローマ人による戦争の技術論から得たものが、かれの軍事思想のみならず、政治思想の根幹ともなった事実(軍事の思考が政治の思考の土台となった事実)を、関連史料の分析を通じて確認することにある。

第二に、上のこととも関係するが、マキアヴェッリ政治論のモデルとなる人物は——これまで漠然と「チェーザレ＝ボルジア」だとされてきたのだが、これを覆し——それが「古代のリーダーないし戦う市民」であったことを確認し、その帰結を考えることにある。

第三に、『君主論』と『ディスコルシ』とは——これまで別々に扱われる傾向が強かったが——実はその主要内容が全面的に重なっていることを確認し、このことの帰結を考えることにある。

第四に、ほぼ同時期にマキアヴェッリが書いた、『戦争の技術』（1519-20年）、喜劇『マンドラーゴラ』（1518年）、短編『大悪魔ベルファゴール』（1518年）、そして『カストルッチョ＝カストラカーニ』（1520年）が、「戦術」とくに策略へのマキアヴェッリの強い関心を軸にしていることを確認し、またそれらと『君主論』・『ディスコルシ』（ともに1513年頃）との内容上の重なり、そのことの意味を考察することにある。

第五に、マキアヴェッリよりも100年も前の思想家クリスティーヌ＝ド＝ピザンに着目し、彼女が、マキアヴェッリと同様に上記古代の書に依拠して軍事を考察し、その頭で政治をも論じたことが、彼女が実質的にマキアヴェッリを先取りするかたちで、軍事思想のみならずその応用としての政治思想をも提示していた事実を確認し、その意味を考えることにある。

第六に、これらを踏まえて、いわゆる「近代政治思想」の成立史について新たな見方を提起し、また軍事・政治の思想にはどのような特徴があり、それを構成する諸要素が全体としてどのような構造を成しているか、軍事・政治のリーダーはどのようにことに留意すべきかを考えることにある。

上記の一連の古代の書は——単にルネサンス以降においてだけではなく——中世を通じて軍学書としてよく読まれ活用されていた。クリスティーヌもマキアヴェッリも、その軍事論の伝統の線上に位置づけられる。そしてかれらがそれを政治論にも応用したことが、「近代政治思想」なるものの重要な始まりだったのである。これまでの政治思想史家たちは、ルネサンスの時代がもつ革新性（新思潮や政治・社会の激動）を強調し、その中にマキアヴェッリを置き、それゆえかれが伝統思想を破壊し、過去とはまったく異色の思考と思想を展開したのだと考えてきた。本稿は、むしろマキアヴェッリが古典古代のパラダイムに浸ったことがその伝統思考を踏まえた提言をもたらしたのであり、それゆえマキアヴェッリは、すぐれて古代

以来の伝統に立脚した、そのことによって今日でも新鮮な軍事・政治の考え方を提示した思想家として理解されるべきだ、と見るのである。

古典古代との連関でかれらの思考を考えることによってはじめて、①軍事・政治の思考が伝統的にもってきた合理的・科学的思考の構造を明らかにできるし、②軍事・政治と道徳とが、一方では切断されつつも、他方では密接に結びつけられている構造をも明らかにできる。また、③それら相互に矛盾し協調もしあう諸要素をリーダーたちはともにその身に担いつつ行動していったのだが、そうした思考がもつ特有の複合性をも、明らかにできる。

筆者は、マキアヴェッリについて先に、『政治の覚醒』（東京大学出版会、2009年）、『法思想史講義』（東京大学出版会、2007年）等を出版している。本稿は——作業の性格上、それら前の作品と構成・引用箇所を重ねるが見られるものの——上記のような、筆者のその後の研究に立脚した新たな観点から書き下ろしたものである。⁽¹⁾

(1) 使用した主な翻訳書は、次の通りである。『カストルツォ・カストラカーニ』（『マキアヴェッリ全集』第一巻所収、池田廉他訳、筑摩書房、1998年）。『戦争の技術』（服部文彦訳、ちくま学芸文庫、2012年）。『マキアヴェッリ 君主論』（池田廉訳、中公クラシックス、中央公論新社、2001年）。『ディスコルシ——「ローマ史」論』（永井三明訳、ちくま学芸文庫、2011年）。クセノポン『キュロス伝』は、*The Loeb Classical Library*, Book 51, 52. による。同『騎馬隊長論』は、*The Loeb Classical Library*, Book 183. による。フロンティヌス『軍略論』は、*Loeb Classical Library*, Book 174. による。ウェグティウス『軍事学』は、*Vegetius, Epitome of Military Science*, translated by N. P. Milner 1993, second edition 2011. による。Honore Bonet, *Arbre des batailles; The Tree of Battles*, G. W. Coopland (Translator, Introduction), 1949による。Christine de Pizan, *Fais d'armes et de Chivalerie; The Book of Deeds of Arms and of Chivalry*, Edited by Charity Cannon Willard, and Translated by Sumner Willard, 1999, Christine de Pizan, *Livre du corps de policie; The Book of the Body Politic*, Edited by Kate Langdon Forhan, 1994.

第1章 『カストルッチョ＝カストラカーニ』 ——軍事リーダーの具体像

マキアヴェッリが1520年に書いた『カストルッチョ＝カストラカーニ』は、14世紀にルッカを支配した一傭兵隊長の伝記である。虚構性がきわめて強いが、それだからこそ、この小伝はマキアヴェッリの軍事・政治思想を物語る、貴重な資料の一つとしてある。

この小伝では、カストルッチョがどのように戦争をしたかが話の中心であり、この点でマキアヴェッリが同年に書き上げる『戦争の技術』と性格が重なる。しかしまたカストルッチョは、1513年の『君主論』第6章が扱う〈自分の力で権力を取った君主〉に当たり、中身においては、巧みな軍事・政治上の策略を駆使して成果をあげていった点で、『君主論』第7章のチェーザレ＝ボルジアにそっくりである。

この小伝にマキアヴェッリの思想のすべての論点が出ているわけではないが、われわれはまずこれによって、マキアヴェッリのリーダーの具象的なイメージ、とくにそこに見られる、徳性と非道徳・マキアヴェッリズムとの関係の態様を見、マキアヴェッリ考察の手がかりを得ておこう。

ルッカは、フィレンツェの西65キロ、ピサの東北25キロの地に位置する盆地の町である。12世紀以来フィレンツェにさきがけて、絹織物で栄えた。ルッカは、1120年から、ナポレオンの侵攻を受ける1805年まで、基本的に市民による自治都市を持続させた。カストルッチョはこのルッカで1316年にクーデタによって僭主（独裁者）になり、1328年に死ぬまで、町の勢力圏を拡大し続けた。マキアヴェッリは、1520年にフィレンツェ政庁から派遣されてルッカに滞在した。その折にこのリーダーに注目し、史料を集めて同年中に『カストルッチョ＝カストラカーニ』を書く。なぜ注目したか。それは、チェーザレ＝ボルジアをめぐつと同様、マキアヴェッ

リがあらかじめもっていた理想のリーダー像——後述のようにそれは古代ギリシャ・ローマのリーダーないし市民のイメージから来る——に、カストルッチョが重なったからだ。

実際マキアヴェッリにとってカストルッチョは、ピリポス王やスキピオに匹敵する天才的リーダーだった。「生きていれば、カストルッチョはアレクサンドロス大王の父であるマケドニアのピリポス王に劣らず、またローマのスキピオに劣ることもなかった。が、両者と同じ歳〔44歳〕で彼は死んだ。もしも彼がルッカではなく、マケドニアかあるいはローマを祖国としていたなら、ピリポス・スキピオを明らかに凌駕していたことだろう」(292頁)と。後述するようにマキアヴェッリは、スキピオを格別に敬慕していた。マキアヴェッリは、カストルッチョがそのスキピオに並ぶと見たのだ。

もつとも——忘れてはならないが——カストルッチョは傭兵隊長から僭主になった者であり、第4章3-(5)で見るようにマキアヴェッリは傭兵も僭主も嫌いだっただから、全面的にマキアヴェッリの理想的君主だったとは言えない。この作品でマキアヴェッリが着目しているのは、軍事リーダーとしての技能であり、どういう内容の政治をどのように遂行したかは描いていない。カストルッチョの12年間は、軍事行動に費やされ、日常の政治を充実化するには時間がなかった。この点は、ボルジアやハンニバルにおいても同じである。かれらについても、評価は実際には軍事中心、とくに策略の見事さについてであり、統治力については書かれていない。

まずマキアヴェッリは、カストルッチョの高い徳性について書いている。

「立ち居振る舞いには、たいへんな慎みがあった。というのも、誰も彼が不快な言葉をもらすことを耳にしたことがないし、またそうした行動をとったことを見たこともなかったからである。カストルッチョは目上には恭しく、同輩には控えめで、また目下の者たちには好かれた。こんなわけで彼はグイニージ家一門からだけでなく、ルッカの全市民から愛された。」(270頁)

「容貌は気品にあふれ、人間味豊かに人びとを受け入れたため、何かを不服として彼にくっつく者は誰一人としていなかった。」(288頁)

「友には感謝を忘れず、敵には怖れられ、領民には公正、よそ者には信義を欠いた。」(同頁)

このようにマキアヴェッリが見たカストルッチョは、慎み深さ、気品、人間味、感謝の心、正義尊重といった伝統的徳性を備えた人物だった。かれはこのゆえに、人びとから愛された。徳性のこの高さが、かれがルッカにおいて政治的に上昇することや、危機に際して友人たちに救援されることを可能にしたのだ。もちろんこれは、カストルッチョが効果を計算してそのように道徳的に振る舞ったということではない。徳性が高かったことが、結果としてそういう効果をもたらしたのである。

このようにここでは高い徳性と、後述するマキアヴェッリズムや暴力性が、カストルッチョにおいて共存している。ということは、そのように見ている当のマキアヴェッリ自身においても、道徳重視の姿勢と非道徳的手段の必要性を説くことが共存していることを物語っている。

マキアヴェッリは、カストルッチョについてまた言う、「危険に飛び込むのに、より大胆な者など他にいなかった。そこから脱出するのに、より慎重な者も他にはいなかった。よく口にしていたのは、人間は途方にくれてなどいないで何でもやってみなければならぬ、ということだった。」(288頁) カストルッチョが本当にそう言ったかは、重要ではない。ここにマキアヴェッリの一つの姿勢が出ていることが、重要である。ここには勇氣とともに、(マキアヴェッリが『君主論』や『ディスコルシ』で、ローマ人の姿勢としてしばしば強調するところの) 決断力が前面に押し出されているのである。

捨て子だったカストルッチョは、ルッカの傭兵隊長フランチェスコを後見人にして育ち、軍事リーダーとして頭角を現した。かれは既に18歳の時に、ミラノの内乱に際して一つの部隊を委ねられてパヴィアに出陣し、武功を立てた。「この遠征をつうじてカストルッチョはおのれの思慮と胆力

を知らしめたため、その戦いに参列した者の誰一人として、しかるべき名声を彼以上に得ることはなかった」(270頁)として、知性(賢明さ)と勇氣の徳が強調されている。

パヴィアから帰ったカストルッチョは、ルッカ内部で「味方を得るのに必要な手だてを駆使しながら」盟友を増やしていった。かれの政治・軍事の基本姿勢について、「策略で勝るときには、むやみに武力に訴えようとはしなかった。勝ち方ではなく、勝利が栄光をもたらすのだ、と彼は言っていた」(288頁)、とある。孫子の「兵は詭道なり」である。実際カストルッチョは、巧みな、時には汚い、策略によって戦果を挙げていった。次の諸事例の扱い方からは、マキアヴェッリが策略にいかに関心をもっていたかが分かる(本稿20頁以下参照)。

すなわち、カストルッチョの名声が高まり権勢が増すにつれ、嫉妬する者がルッカ内に出てきた。その動きを察知したカストルッチョは、ピサの僭主ウグッチョーネと謀って、かれにルッカを攻撃させ、その混乱に乗じルッカの内部でクーデタを実行し、教皇支持派の要人たち多数を殺害するとともに百家族以上をフィレンツェ等への亡命に追いやり(カストルッチョは皇帝支持派であった)、ルッカでの地位を固めた。

また、このためフィレンツェとの緊張が高まり、ルッカの東、モンテカルロの地で両都市の軍が衝突するにいたった。カストルッチョは、敵に自分たちが怖じ気づいているとのそぶりを示して「敵方を十二分に浮足立たせ」てから、行軍を始めた。会戦の場において、敵が精鋭部隊をその中央に配置していることを確認したカストルッチョは、自軍の両側面に精鋭部隊を配置し、中央の部隊には進軍を遅めにするよう指令した(この戦術は、スキピオがスペインでハズドルバルと戦ったとき採ったものである。『戦争の技術』153頁)。こうして敵の(弱い)両翼をまず効果的に粉碎したので、敵の精鋭部隊は闘うことなく潰走を始めた。結果は、カストルッチョ軍の戦死者300人に対し、敵方の損失は1万人であった。

ピサの僭主ウグッチョーネは、カストルッチョの名声が高まったことに

嫉妬と警戒心をもち、ある日、宴会にカストルッチョを招き、かれをそこで捕獲した。しかし、ルッカのカストルッチョの仲間たちが蜂起し、カストルッチョの釈放をかちとった。人望・友情が、命を救ったのである。

1年任期の防衛隊長となったカストルッチョは、周辺の土地を次々と攻略していった。かれは凱旋後、要人たちを買収して支持を取り付け、ルッカの僭主に昇っていった。そしてトスカーナ全土の君主になる意を固めた。そこでかれは、まずルッカの城塞化と軍備強化を図った。「都市内はくまなく、周辺地域も武装化させた。ルッカには5つの城門があったので、コンタード〔属領の周辺農村地域〕を5つに区分し、それぞれに戦闘隊をつくって補佐官と強者たちを送り込んだ。こうして瞬く間に2万人の兵士をかき集めた。」(275頁) ここには自分の都市の市民で編成した軍隊、すなわちマキアヴェッリが重視する、属領・保護領の農民を核にした「市民軍」を、カストルッチョが先駆的に編成していたことが書かれている。

カストルッチョの外征中、ルッカでポッジョ家を中心にした、不満分子の反乱が勃発した。しかし、ポッジョ家の長老で平和主義者のステファノが介入して一家の矛を収めさせた。カストルッチョがルッカに帰還すると、ステファノは自分が平和を確保したことにカストルッチョは恩義を感じているはずだと思ひ込み、ポッジョ家と和解してくれるよう話しをつけに来た。カストルッチョは、「大丈夫ですとステファノを納得させた」うえで、「自分の寛容さと鷹揚さを披露する機会ができて神に感謝しております」と言って、ステファノを和解の酒宴に招待し、かれの家の若い者全員も連れて来るよう促した。ポッジョ家の人びとが、ステファノとカストルッチョとをすっかり信用してやって来ると、カストルッチョはステファノともどもかれらを捕らえ、全員を殺害してしまった。裏切りのマキアヴェッリズムを使って政敵を効果的に抹殺したのである。

ピストイアの町を支配下に置く際にも、背信的な策略を使った。当時この町は、2派が対立して内乱状態を呈していた。その両派が同時期に極秘で、相手を倒すためカストルッチョに傭兵部隊を求めてきた。カストルッ

チヨは、兵士たちを二つに分け、それぞれをこの町に派遣した。兵士たちは到着後、打ち合わせていたとおりに合図によってピストイアの要人たちを一気に殺害し、この町を支配下に収めた。ここに見られるのも、政治的マキャヴェッリズムの効果的行使である。ピストイアの町を支配下に置くことは、フィレンツェ攻略に不可欠だった。これをフィレンツェとの休戦協定中におこなったわけで、この点で二重の背信行為であった。

このためフィレンツェとの関係が悪化し、両都市の中間地点、山間部の城塞都市セッラヴァッレ付近で合戦となった。フィレンツェ軍 3 万に対し、カストルッチョ軍は 1 万 2 千であったので、カストルッチョは峡谷で戦うことを選んだのだ。カストルッチョは、予め密かにセッラヴァッレを占拠し、兵を配備しておいた。合戦の日、フィレンツェ軍が狭い谷間の道を登って来た。これを、待ち構えていたカストルッチョ軍が上から攻撃する。このためフィレンツェ軍は、「敵勢よりもむしろ地形に負け」て総崩れとなり、潰走した。カストルッチョはそのまま敵を追って軍を進め、フィレンツェ市壁にまで迫った。カストルッチョは、一人のフィレンツェ人を買収して町に入って占拠する計画を進めた。しかしこの作戦は、買収が発覚して失敗した。

1328 年 5 月、ピサをめぐるフィレンツェと戦う。フィレンツェは 4 万の大軍でピサに迫り、カストルッチョは 2 万 4 千の兵でこれを迎え撃った。カストルッチョはフィレンツェ軍がピサの近くでアルノ川を渡河するよう仕向けた。深い流れの中を進んでいるフィレンツェ軍には、まもなく混乱が生じる。カストルッチョ軍は、岸に上がろうともがくフィレンツェ軍を、土手を機動的に動いて効果的に攻撃した（この戦法は、カエサルがヘルヴェティア軍に対しておこなったことで有名である。『戦争の技術』164 頁）。

渡河し終えたフィレンツェ軍の部隊に対しては、カストルッチョは猛烈な攻撃を加えた（東洋における「半渡を撃つ」の作戦である）。その後、戦闘が長引いたときには、あらかじめ待機させておいた歩兵 5 千人を送り込み、疲労困憊の相手を叩きつぶした。この戦闘での損失は、フィレンツェ

軍2万231人、カストルッチョ軍1570人で、カストルッチョの完勝であった。

しかしこの戦闘が終わった夜、カストルッチョは重い病にかかり、まもなく死去する。戦闘後、凱旋する兵士たちをピサの城門で迎えるため、汗に濡れた体をアルノ川からの冷たい風にさらしつつ長時間立っていたためだ。享年44歳だった。ボルジアの場合もそうだが、運命の女神は、人を幸福の頂点から突如どん底に突き落とす、恣意的な絶対者なのだ。

以上の記述においては、中世盛期（1300年頃）であるにもかかわらず、騎士道とは無縁の、古代以来の戦術、とくに策略にもとづく戦争と政治が展開している。マキアヴェッリはなによりも、カストルッチョの、この巧みな戦術、マキアヴェッリズムに魅せられている。

この小伝では、軍事と政治とは不可分で、かつ君主は、第一義的には指揮官である。そしてこの君主においては、人間としての高い徳性（気品・人間味・謙虚・正義・賢明さ・勇気）の重視と、戦争・政治における巧みな（合理的な）作戦と、マキアヴェッリズムや暴力行使とが、共存（雑居）している。それゆえここでのマキアヴェッリにおいては、マキアヴェッリズムや暴力に訴えるリーダーが心の底まで不道德ということではない。むしろ両者の使い分けが、当然の前提となっている。人間観としても、マキアヴェッリズムや暴力で行動するからといって、その人間が性悪だということになってはいない。高い徳性の持ち主だからといって、マキアヴェッリズムや暴力に訴えないというものでもない。そして、道德とマキアヴェッリズムとの相克を意識している風もない。これがここでのマキアヴェッリの思考であり、それは古代以来の伝統的な考え方でもあった。

第2章 『戦争の技術』——リーダーはどう戦うか

『カストルッチョ＝カストラカーニ』からは、戦術を駆使してうまく戦

うことが、マキアヴェッリの一大関心事であったことが分かった。このマキアヴェッリは『君主論』第14章で、「さて君主は、戦いと軍事上の制度や訓練のこと以外に、いかなる目的も、いかなる関心事ももってはいけなし、また他の職務に励んでもいけない」と言っている。マキアヴェッリのリーダーについて考える際には、「軍事」がきわめて重要なのである。

『戦争の技術』は、この戦争の仕方を集中的に論じた作品である。本節ではこれを取り上げ、マキアヴェッリの戦術論の特徴を考えるとともに、それを踏まえてかれの政治思想をも考える。というのも、軍事上の諸戦術は、ほとんどが政治上の諸戦術、いわゆる「政治学上のリアリズム」（政治を動かしているのは、タテマエでなくホンネ、すなわち情念、私益追求・権力への意志であり、力関係が決定的だとする現実直視の立場）やマキアヴェッリズムと、同一のものであるからである。これは、戦争と政治とがともに「友と敵」の関係を本質としていることによる（戦う手段は異なるが）。マキアヴェッリの著『戦争の技術』を深めることは、それゆえ『君主論』・『ディスコルシ』を理解するための基礎固めともなりうる。『戦争の技術』は、これまであまり重視されてこなかったが、マキアヴェッリの政治思想を知るための重要な本としてあるのだ。

『戦争の技術』は、ファブリチオ＝コロナを囲む会話のかたちをとっている。ファブリチオは、フィレンツェに立ち寄ったローマの名門貴族で軍事経験が豊かな人物だと設定されており、かれの発言がほぼマキアヴェッリの思想の表明となっている。この本でマキアヴェッリは、古代の歴史書や戦術論の本から学んだことをベースにしつつ、軍事と政治・外交とを論じる。

ここでマキアヴェッリは、古代のローマを軍事・政治の技術の点でも、民衆とリーダーとの徳の高さの点でも讃美する。そしてそれとの対比で、かれの時代のイタリアの現状を嘆く。

マキアヴェッリが讃美する古代ローマは、「徳を讃えそれに報いること、貧乏を蔑まぬこと、軍隊生活および軍事規律を敬うこと、市民たちが互い

に愛し合うべく党派を作らず、私事よりも公事を優先させること」にあった（18頁）。かれは、このようなローマの市民をこそ今日の人は模範とすべきだと言う。「わたしは、わがローマ人から離れるつもりはない。たとえば、かのローマ共和国の人びとの生活や諸制度を考えてみれば、その多くはまだ何がしかの善が残っている文明にとって導入できる部分もあるはずだ」と（17-18頁）。この本には、マキアヴェッリの道徳的善への真摯な姿勢、かれの理想主義的側面がきわめて濃厚に出ている。すぐれた徳性の古代ローマ人、とくにそのリーダーたちへの憧憬が顕著なのである。

1 市民軍重視・反傭兵

マキアヴェッリは、自国の市民を徴兵して市民軍を編成することが重要だとする。かれによれば、傭兵や外国の支援軍は、いざというときに戦線を離脱するなど頼りにならないばかりか、敵と裏取引をして自分たちに牙を向くことさえある。このことは、過去の古代ギリシャ・ローマやカルタゴ等の経験からも、今日のフィレンツェやミラノの経験からも明らかだ、と。

マキアヴェッリは、この点にも関連して職業軍人を毛嫌いする。かれによれば、戦争を職業にする人間にろくな者はいない。職業軍人は、戦争を自分たちの利益を獲得する手段にし、権力を奪い取って「専制的な暴政」をもたらす点で、有害でかつ危険である。だから君主国でも共和国でもそのリーダーたちは、「制度が良く整っている場合には、自国のいずれの市民にも臣民にも、戦争を職業とすることなど決して認めはしなかったし、善良な人間の誰もが戦争を自分の生業とすることなど断じてなかった。なぜなら、戦さをなす者が善良だとはとても考えられないし、そんな輩はいつでも戦争から利益を得ようと、きまって強欲、ペテン、暴力に走るばかり、当然のことながら良しとはされない幾多の性質に染まるわけだ。」（21頁）とかれは言う。マキアヴェッリがいかに裏のない、善良な心で軍事・政治を考えているかは、すでにこの箇所から明らかである。

古代ローマでは、このような職業軍人であるポンペイウスやカエサルらが出現するよりも前の時代の市民軍とその非職業軍人たちは、「勇猛でかつ善良」だった。その典型としてマキアヴェッリが讚美するのは、アッティリウス (Marcus Atilius Regulus、紀元前307年頃-250年) である。かれはアフリカでの対カルタゴ戦にコンスル (政務・軍務の最高責任者) として遠征し、戦争が勝利で終わるや否や、「任務を終えたから、家に帰らせてほしい」と元老院に願い出た。その理由は、自分の農地 (国から割り当てられた 2 ユゲラ (0.5ヘクタール) の狭い土地) を使用人が荒らしてしまったとの報を受けたから、すぐ帰って手当したいというものだった。その地位を利用すれば、勝利の戦争から私益をはかることは容易だったが、かれにはそういうことは眼中になかったのだ。マキアヴェッリは言う、「こうした善良な人たちは戦争を自分の生きる手だてなどにせず、労苦と危険、それと栄光以外には戦争から何も得ようとはしなかった」(25頁)。

すべての市民が武装して自国をまもる市民軍は、軍事を自己目的化しないためにも、軍隊を私物化させないためにも、市民の公共心を育てるためにも、軍事訓練を徹底させるためにも、さらには国内に侵入してきた敵に総力で徹底抗戦しうるためにも、欠かせない。市民に武器を与えると治安が乱れる、という意見に対してマキアヴェッリは、治安の善し悪しは、市民が武器をもつかもたないかとは関係がない。法律遵守の生活が習慣化しておれば、市民は穏やかに生き、武器をもつても危険ではない、と答えている。独立期のアメリカや今日のスイスでの議論を思い出させる。

市民軍は、都市の領地である属領・保護領の農民を中心とし、都市の職人や技術者をも動員して編成する。徴兵検査に当たっては、「正直で自制心があるかどうかを見定めなければならない」(46頁)。これらの健全な兵士が広く集められるのも、市民軍制の長所である。

2 訓練と紀律化

集めた兵士は、命令を受け次第一つの身体のように動ける組織へと、軍

事訓練と紀律ある生活を通じて育て上げられる。訓練で重視すべきなのは、次の三つである。「第一は、肉体を鍛練し、困難に立ち向かい、敏速ですばしこくなること、第二は武器の操作法に習熟すること、第三は、軍隊における隊列編成を遵守すること、行軍中でも戦闘中でも、野営中でもある。」(75頁) 普通の市民であっても、訓練と紀律を重ねれば、立派な兵士に成長していく。「古代の諸例からも分かるとおり、どの国であっても訓練次第で良き兵士を作れるからだ。それに、自然が欠けているところでは、努力が補完するというもの、この努力こそが今の場合自然よりも貴重なのだ」(34-35頁)、と。

訓練（演習）と紀律によって立派な軍隊を作り上げたのが、古代のギリシャやローマである。マキアヴェッリは、とりわけローマの軍隊制度を、この点で高く評価する。「軍隊を健全に保つのに、演習ほど役立つものはない。だからローマ人は、毎日のように兵士らに演習を行わせた。そのことから、この演習がどれ程有効かが分かるというもの、なぜなら兵舎にあっては健全に、戦さにあっては勇猛にしてくれるからだ。」(220頁) そしてマキアヴェッリは、紀律化されたローマ軍の健全さに照らして、かれの同時代の軍隊の放縦さを次のように批判する。「ローマ人は、支給食を必要な時に食べるように定めていた。どの兵士であれ、指揮官が食す時以外には口にしなかった。それが今日の軍隊によってどれくらい守られているか、誰もが知るとおり、ローマのように秩序があるとか、節制に富むなどと呼べるものではなく、まったくもって放縦で麻痺状態だ」(221頁)。

3 戦場におけるリーダーの知と徳

(1) 統率力

指揮官にとってなにより大切なのは、軍隊を結束させることである。それは、単なる技術問題ではない。指揮官の力量、すなわちその有徳性と軍事・統治の能力に支えられた統率力が問題になるのである。「軍隊の団結を作り上げていくのは、指揮官の評判だ。これは、ひとえにその者の力量

から生まれるのだが、高貴な生まれであれ権威であれ、力量がなければ決して評判を高めるものではない。」(230頁)

統率力は、とりわけ危機下で輝く。指揮官は敗北下においてもなお、勝利の糸口を探って立ち上がる不屈の人でなければならない。しかもその際にも、ただむやみに反撃するというのではなく、冷静に敵のスキを探り、そこを撃つのである。「だが負け戦さならば、指揮官たるものは、敗戦から何か有利なことが自軍に生ずるかどうか見分けるべきで、とくに、彼に何らかの残存兵力が余っている場合にはそうである。好機は、敵が用心を欠くことから生まれ、往々にして敵は、戦勝のあとは注意散漫となり、味方に敵を制圧する機会を与える。」(161頁) 古代ギリシャの軍学者オナサンドロス (Onasandros, 紀元 1 世紀) は、その『指揮官』⁽²⁾ 13-1~3 で、逆境の時は指揮官がとりわけ明るく元気でなければならないと言っている。兵士たちは危機下では、リーダーの表情に対しとりわけ敏感たらざるをえないのだ。

指揮官に求められるその他の能力・心構えについてはあとで詳しく見るが、マキアヴェッリが、軍隊内の団結を固めるためには指揮官は全員討議の場で雄弁を示さなければならないとし、かれの時代のリーダーにはこの資質が欠けていると嘆いている点は、注目に値する。指揮官は、その人格性から出てくるかたちで兵士の心に強く訴え、確信を育てなければならない。

「難しいのは、共通善あるいは指揮官の意見に反対の誤った考えを、大勢の者から取り払うことである。このような場合、使えるのは他でもなく言葉に限られ、すべての兵士を説得しようと思えば、全員に聞き入れられるのが相応しい。だから、人並はずれた指揮官たるものは、弁論家であらねばならず、というのも全軍に語りかける能力なしには、望ましい結果を得るのが困難だからだ。この点、現代においては全くなおざりにされている始末だ。ア

(2) *Aeneas Tacitus, Asclepiodotus, Onasandros*. Translated by Illinois Greek Club, Loeb Classical Library, Band 156, 1928.

レクサンドロス大王の伝記を読んでも、彼がその全軍を前にして熱弁をふるい、語りかけることが、どれほど必要であったか分かるだろう。[…] それというのも、指揮官が兵士に語りかけることができぬか、あるいはそれに慣れていないと、軍隊崩壊の危機が夥しいほど発生するからだ。」(170頁)

実際、古代ギリシャの軍人で文筆家であるクセノポンが書いた『アナバシス』や『キュロス伝』は、危機的な局面で指揮官が演説によって兵士の動揺を立て直していく様子を詳しく描いている。そうした演説は、指揮官の実力と品格、実績に支えられていなければ、兵士の心に染み入ることはない。兵士全員での討議、そこでのリーダーの雄弁は、すでにホメロスに見られる。問題が生じると全体集会が開催され、指揮官はそこで自分の弁舌の力で兵士たちを励ましまとめ上げる。ギリシャの民主主義の伝統がすでにこの時点で、軍隊内でも働き、全員の納得が力の源泉と考えられていたのだ。

マキアヴェッリは、古代のこのような全人格的リーダーシップの再生を考えていた。

(2) 指揮官のリアルな思考・賢明さ

戦争を指揮する時には、客観的な認識がとりわけ重要である。戦闘とは、自軍と敵軍とが戦場で戦うことである。したがって、これら三つの構成要素（友・敵・戦場）とその相互関係に対する客観的な認識が重要である。指揮官は、それらの認識を踏まえて、戦うかどうかを決める。今戦うのでは不利だと判断すれば、戦わない。主観を排し客観性を重視するのである。マキアヴェッリは、古代ローマの軍学者ウエグティウスのことば（『軍事学』第3巻26章）をそのまま使って、「良き指揮官は、必要に迫られなければ、また好機がかれらを呼び寄せなければ、決して戦争には打って出ない」（164頁、265頁）と言う。『老子』第31章の、「兵は不祥の器。君子の器にあらず。やむをえずしてこれを用いる」に通じる思考である。『孫子』の冒頭（第1編）にも、「兵は国の大事」ゆえ、軽々しく扱うな、と

ある。

敵の認識については、「何よりもまず、敵の指揮官とその側近を知ることが重要となる。かの指揮官は向こう見ずの男か、それとも警戒心の強い人物か、臆病か大胆なのかを知らねばならない。外国の援助兵については、どれほど信用がおけるものか調べておくこと。とくに恐れているか、あるいはどうにも勝利のおぼつかない兵士を、戦闘に導かぬよう注意しなければならない」(166頁)とある。これらのためには、情報を得るための工夫を要する。たとえば、敵の編成や性質を知るために、敵との交渉団の中に軍事的認識に長けた者を紛れ込ませて調べさせたり、忠臣を逃亡者を装って敵側に入らせてスパイ活動をさせる、といったことである。(225頁)

注意深い指揮官は、敵の行動の様が理屈に合わなければ、それを疑ってかからなければならない。たとえば、もし敵が物資を大量に残したまま撤退したら、ワナや企みを予想しなければならない。(188-189頁)

指揮官はまた、戦場では、時間の経過や自然界の動き、さらには両軍の動きによって起こる諸現象をあらかじめ計算し、その動きに機敏に対応した効果的な動きをしていかなければならない。

「軍隊を決戦に向けて整える者は、太陽や風向きを考慮し、そのどちらも味方の正面を手こずらせぬよう注意せねばならない。その理由は、両者とも視界を遮ることになるからで、太陽は眩しく、風は砂埃を巻き上げる。さらに、風は飛び道具類には不都合となり、敵に命中しづらくなってしまふ。太陽については、一時的に光が顔に当たらぬように注意するだけでは十分ではなく、日中はずっと、悩まないように考えるのがよい。このため、兵士を配置するにあたっては、太陽をまっすぐ背にすること、太陽が自軍の正面に回るまでに、十分な時間がとれるようにすべきだろう。」(151-152頁)

変わっていくことの手先を読んであらかじめ備えるのである。この箇所は、ウェグティウス『軍事学』第3巻14章に対応するが、同時に、マキアヴェ

ッリが『君主論』第25章で論じている運命論の第一の論点（先を読んで備えること。本稿68頁以下）に対応している。

指揮官は、敵に対する警戒を怠らず、敵の動きを様々な現象から読み取らなければならない。たとえば次のように。「林の中か、あるいは丘陵地の背後に敵は身を潜ませるものであるからだ。伏兵はこれを予知しなければ、味方の敗北であり、予知すれば、やられはしない。鳥や砂埃が、敵軍を知らせることがたびたびあった。これは、敵が向かってくるときは常に、大きな砂埃が立って敵の襲来を知らせるのだろう。同じく多くの場合、ある指揮官は、通過しなければならぬ地点で鳩が舞い上ったり、別の群れをなして飛ぶ鳥が旋回したまま止まらないのを見て取ると、それで伏兵の存在を知って、偵察兵をまず送り出した。そして敵に気付けば自らを守り、敵を迎え撃ったのである。」(189頁) 東洋でも『孫子』が「鳥起者伏也」（遠くで鳥が舞い上がるのは、伏兵がいる印だ）と論じている。源義家が後三年の役でそれを実践した故事は、これの応用による。

マキアヴェッリは、自然現象に対して兵士のもつ恐れや、かれらの^{げんかつ}験担ぎを、指揮官が次のような醒めた科学的姿勢（呪術を排する「世界の脱魔術化」）で除去していくことの重要性を説く。

「さらに古代ローマの指揮官たちには、現代人からすればほとんど関係のない苦心があった。それは不吉な兆候でも自分たちに都合のいいように解釈しなければならないことだった。たとえば稲妻が軍隊に落ちたり、日食や月食が起こったり、地震が生じたり、指揮官が馬の乗り下りの際に落馬でもすれば、兵士らには不吉と解釈され、会戦に至っても簡単に敗れるのではないかといった大層な恐れが生じたのだ。そこで古代ローマの指揮官たちは、こんな事件が発生するや、その原因を示して自然のせいにするか、それを自分たちに都合よく解釈したものだった。[ユリウス=]カエサルは、アフリカの地で下船の際にころんだものの、こう言った。「アフリカよ、わたしはおまえを今捕まえたぞ」と。そして多くの者たちが、月食や地震の原因を説明してきた。こういったことは、われわれの時代には起こり得ないが、それは今

日の人びとがそれほど迷信深くないためで、またたしかにわれわれの宗教の方でもそうした憶測にはまったくとりあわないからだ。しかし、万が一必要とあらば、古代ローマ人の様式に倣わねばなるまい。」(230-231頁)

将帥の科学的精神は、後述するようにすでに(古代ローマの)フロンティヌスや、(中世の)クリスティーヌが扱っているところである。古代・中世以来一貫して、戦争の技術は科学的な合理性に立脚していたのである。近代がそれを生んだのではない。

もっとも上からはマキアヴェッリが、自分たちが兵士の精神にもすでに科学が浸透した時代に住んでおり、この点で、兵士たちが迷信に影響されていた時代は終わった；リーダーはこの点で荷が軽くなっている、とルネサンス精神を自覚していたことをも確認できる。

軍事での(友・敵・戦場に対する)こうしたリアルな認識は、政治における(友・敵・状況に対する)リアルな認識に通じる。マキアヴェッリより前の多くの政治論では、「君主はこう振る舞うべし」と、道徳論を基礎にした議論が強く、現実よりタテマエ論が、古代以来洋の東西を問わず支配的であった。この古い政治論の世界に、戦術論の思考を持ち込み、政治論をリアルなものにし、また次に述べるように策略を重視したのが、マキアヴェッリだったのだ。

(3) 策略

『戦争の技術』では、戦場で知を働かせて、敵を欺いたり、裏をかいたり、敵の思い込みを利用したり、さらには敵に対し毒を効果的に使ったりすることが、とりわけ詳しく扱われている。その豊富な事例集からは、マキアヴェッリが策略の巧みさを描くことにいかに興味をもっていたかがよく分かる。

実際、『戦争の技術』(1519年から翌年にかけて書かれ、1521年に出版された)とほぼ同時期にかれが書いた、喜劇『マンドラーゴラ』(1518年)、喜

劇的短編『大悪魔ベルファゴール』（1518年）、そして『カストルッチョ＝カストラカーニ』（1520年）は共通して、策略のみごとさの描写を主軸にしている。このことは、マキアヴェッリが日常生活、政治の場においても、その行使の見事さに関心事項にしていたことをよく物語っている。

『マンドラーゴラ』のあらすじは、次のとおりである。その名からして貞淑きわまりない人妻ルクレティアに恋い焦がれた青年カリマコは、友人リグーリオや神父ティモテオと相謀り（二人もそれぞれの思惑をもっていた）、マンドラーゴラを使った策略によって、彼女の夫ニチアが公然と容認し、かつ身持ちの堅いルクレティアが同意するかたちで、ルクレティアと堂々と肉体関係をもつことを実現した。策略は、次のようなものだった：フランス帰りの名医に変装したカリマコは、子供を切にほしがっている年配のニチアに、マンドラーゴラの薬効はすばらしく、これを飲んで同衾すれば必ず妻は妊娠すると説く。しかしこの薬には強い副作用があり、それを飲んだ者はまもなく死ぬ。それゆえ、別の、健康な若者にこの薬を飲ませて同衾させルクレティアを妊娠させるのがよい。若者は、まもなく死んで、子供はあなたのものになるのだから、と。またルクレティアに対しては、友人の告解の僧ティモテオを通じて、「夫を幸せにするために別人と同衾することには、なんら問題はない。天国は保証される」と説得させる。こうして、夫婦がともに納得し、ルクレティアが待つそのベッドに、カリマコは堂々と入っていったのである。

この話には、後段がある。貞淑なはずのルクレティアは、同衾後カリマコに夢中になってしまい、その後は夫に、カリマコという大切な身内がいる、と嘘をついて家への出入りを自由にさせ、密会を重ねる確実な手はずを整えたのだった。

目的のための手段としての策略が次々に案出されるこの劇、みんなが自分の欲望・利益実現のために相手をだまし利用しあうが、最終的にはみんながハッピーとなるこの喜劇は成功し、各地でいくども上演された。

『大悪魔ベルファゴール』のあらすじは、次のとおりである。地獄の王

プルートは、罪を犯して地獄に落ちた男たちがことごとく、結婚生活より地獄のほうがはるかにましだと言うのを不思議に思った。そこで悪魔ベルファゴールを、大金をもたせて地上に調査に派遣した。かれは調査の一環として、フィレンツェで一女性オネスタと結婚した。ところがオネスタは浪費癖が激しく、ためにベルファゴールはまもなく破産となり、債権者に監禁されてしまう。ベルファゴールはほうほうの体で脱出し、その逃亡を助けてくれた農民ジアンマッテオを、見返りにいろいろの策略を駆使して富ませる。しかしやがてジアンマッテオが、かれとの約束を破る。そこでベルファゴールはかれに制裁を加えようとするが、ジアンマッテオは策略を使って対抗した。すなわち、ベルファゴールがこわがっている妻オネスタがここに来ている、と嘘をついたのだ。このためベルファゴールは、あわてて地獄に逃げ帰り、妻どもの悪業を王に報告した、という筋である。

以上からして、四つの作品、『戦争の技術』、『マンドラーゴラ』、『大悪魔ベルファゴール』、『カストルッチョ＝カストラカーニ』が同時期に書かれたのは、けっして偶然ではないことが分かる。4作品の相互関係については、次の通りである。すなわち、『戦争の技術』が戦術論（戦略が重視されている）の基本書として主軸を成しており、『カストルッチョ＝カストラカーニ』はそれを軍人の伝記として具象化したもの、『マンドラーゴラ』と『大悪魔ベルファゴール』は、そうした戦術論を文学作品に応用したものと位置づけられる。これらを通しているモチーフは、策略を使って敵を討つ際の喜劇的なおもしろさ、胸のすくような、策略のてきめんの効果である。戦略が『君主論』や『ディスコルシ』でも重要であること、後述の通りである。

以下では、『戦争の技術』に出てくる巧みな策略の事例を見ていこう。これらそれぞれは、『マンドラーゴラ』の場面を思わせるような、牧歌的な喜劇的シーンだ：

「ドミティウス＝カルヴィヌスは、ある要塞都市を包囲していた時、配

下のかかなりの兵士を引き連れて、日課のようにその都市の城壁のまわりを行進した。すると、中に籠もる人びとは訓練のための行進だと思い込んで、警護を弛めてしまった。これに気づくと、ドミティウスは要塞を攻撃し、その都市を陥落させた。また、何人かの指揮官たちは、籠城兵側が援軍到来と聞きつけるや、援軍の兵士よろしく、その旗印の下に自軍の兵士らを装わせた。そして、入城が果たされると彼らは都市を占拠した。アテナイ市民のティモンは、ある夜のこと城外の寺院に火を放った。すると城中の人びとが救援へに赴いたので、都市は敵の餌食となってしまった。ある指揮官たちはまた、包囲された城塞から補給のために出てくる兵士らを殺して、その補給兵の衣服を味方の兵士たちにまとわせて、彼らを城内に送り込んだ。さらには古代ローマの指揮官たちは、奪取しようとする都市からその防備をはぎ取ってしまうようなさまざまな手立てを使った。」(254-255頁)

「[カエサルが] 自軍を率いてフランス [ガリア] のある河岸にたどり着くと、渡ろうにも対岸に配下の兵士を配備していたガリア人ウェルキングトリクスに阻まれることとなった。カエサルは、川に沿って何日間も行軍すると、敵側も同じことをやった。そこでカエサルは、木立が多く兵士を潜ませるのに程よい場所に宿営を張ると、各軍団から3個中隊を選び出し、彼らにはその場所に留まり、カエサルが出発したらすぐにも橋を架けてそれを補強するよう命じ、こうしてカエサルは残りの兵士団を率いて行軍に出た。そこでウェルキングトリクスは、軍団の数をうち眺め、後には残留部隊はないものと信じ込んで、彼もまた行軍を続けた。かたや、カエサルは、橋が完成した頃と信じてとって返すと、万事整っていたので、難なく渡河したのであった。」(193-194頁)

「戦闘中に敵を欺くのはよくあることで、地形の具合がよければ、敵を伏兵の潜む場所におびき出したりするものだ。他方、地形が開けて拡がっていれば、多く[の指揮官]は穴を掘り、そこを葉の茂った小枝や土くれで軽く被って、そのいくつかの丈夫な空間は退避用に残しておいた。やが

て小競り合いが始まると、味方はその空間に引きさがり、あとを追いかけてきた敵は、穴に落ちて敗れ去った。」(159頁)

「敵方を欺くためには、時々こちらの慣例を何か変えることが役に立つ。前の慣例に従ってくれば、敵は敗れたも同然だ。たとえば、或る指揮官は敵の来襲の際、夜なら火焰をつかって、昼ならのろしをつかって、配下の兵士らに合図を送っていたが、間断なく火焰とのろしを上げておいて、次に敵がやって来たら止めよ、と命じたのだ。敵方は、気づかれずに近づいていると思ひ込み、見つかった時の合図もないので、たがが緩み出したことから相手方の勝利を実に容易にってしまった。」(232頁)

「或る地方に侵攻しようとする際、ある者たちは別の場所を攻撃するぞと見せかけて、それは巧妙にも、攻め込まれるなどと思ひつかない地方に侵入するや、敵方が救援に来る前にその地方を抑えてしまった。」(229頁)

「ピュロス王がスキアヴォニア〔イリュリア〕地方の首都に戦端を開いた時のこと、そこには実に多くの兵士が守備隊についていたので、王はこの都市の攻略を断念するかのよう装った。そして別の場所に向いかけると、その都市は救援のためにと守備隊を差し向けたので、結果的には容易に征服されてしまうこととなった。」(255頁)

『戦争の技術』においても、チェーザレ＝ボルジアが策略にずば抜けていたことが、感嘆を込めて指摘されている。「この件についてはチェーザレ・ボルジア、通称ヴァレンティーノ公の例を引き合いに出さないわけにいかない。彼は麾下の兵士ともどもノチェーラにあって、カメリーノ攻略に出かける様子を見せたが、踵を返すやウルビーノに向い、一国を一日にして何の造作もなく占領してしまったのだ。他の者ならば、充分な時間と資金をかけても、どうにも占領できなかつたに違いない。」(254頁)

策略はまた味方に対しても、良い結果をもたらすためには使うことが許される。「戦闘中に、味方の兵士を愕然とさせるような突発事が起きる時は、その出来事をひた隠しにして、良いことの前兆と思わせることが、きわめて賢明だ。」(159頁)、というようにである。

敵が迷信に従って行動しているのを撃つのも、重要な手の一つである。「ある指揮官は、敵軍がしかじかの時刻に戦闘行為はしないという或る種の迷信に取り愚かれているのを知り、戦闘用にくだんの時刻を選んで勝利した」。これは、カエサルがガリアでアリオウストゥスに対し、またウェスパシアヌスがシリアでユダヤ人に対し、使った。(165頁)

敵の心に思い込みを生じさせ、それが敵にもたらしたスキを狙って相手を撃つ手もある。「マルクス・アントニウスが、パルティア軍を前にして、陣営から出ては戻る行進をしていた時のこと、彼が気づいたのは、夜が白みかけるころに動き出すと、敵は毎日攻撃を加えてきて、行進中ずっと邪魔をしてくるということだった。そこでアントニウスは、正午前には出発しないよう心に決めた。するとパルティア軍は、その日はアントニウスが宿営地をたたまないものと判断して、自分たちの陣営に引き揚げた。そこでマルクス・アントニウスは、何の妨害も受けずに、陽の残る間中、行進を続けることができた。」(196頁) 上で、ドミティウス＝カルヴィヌスに見た手である。

敵の不注意を突くのも、重要な技術である。「人間というものは、より疑念を差しはさむことが少ないほど、そこをつかれるとやられやすい」(162頁) からである。これによって、敗北を逆転することも、可能となる。「時には、敵があまりにも無闇に君を追跡してきて、へとへとになっていることがある。となると、味方が生気にみち休養十分ならば、この好機を見逃す手はない。これに加えて、敵が早朝に戦闘を挑んでくるなら、君は長時間かけて宿営地からの出陣を引きのばすことだ。敵が武具をまとったまま、立ち向かってきた初めの意気込みも失せたころ、その時こそ彼らと一戦交えるのがよい。」(162-163頁) これは、スペインでスキピオがハズドルバルに対し使った。先にカストルツォ伝にも見た。

敵の行動を巧みに利用する、次のような知恵も示されている。「またある者たちは、敵勢力を分断するために、敵が自国に侵入するにまかせて好き勝手に多くの領土を略奪させておいた。これは、敵が占領地に守備隊を

置くまでその勢力を削減させるのが狙いだった。こうして、敵の兵力を弱めてから、敵を撃破した。」(229頁)

敵を包囲したとき、殲滅させようと一挙に撃って出るのは、危険である。効果的なのは、敵の心理を利用することである。たとえば、わざと逃げ口をつくっておき、そこをめがけて敵が隊列を乱して逃げるとき、それを背後から撃つ手である。「敵方を絶望の極限に追い込まぬように注意しなければならない。この点については、ゲルマニア人との戦闘の際にカエサルが気をつけたところだ。逃げ場がないと、その必要性が彼らを強くするのが分かっていたため、カエサルは相手に退路を開けておいた。そして、守りに入ったゲルマニア人を討ち負かす危険よりも、むしろ彼らが逃げ去ってから追撃する労苦の方を望んだ。」(233頁) 同様に、逃げる敵を見境もなく深追いするのも危険である。敵は、絶望のあまり、向きを変え必死に反撃してくる。これらは、『孫子』九変篇第八の一の「帰師には遏むること勿かれ、圍師には必ず闕き、窮寇には迫ること勿かれ」、すなわち逃げる敵は深追いするな、包囲した敵には逃げ道を準備してやれ、絶体絶命の状態の敵には手を出すな、に当たる。

逃げる敵が、実は伏兵を残していることがある。こちらが深追いすると、逃げる敵はころあいを見て攻勢に転じ、隠していた伏兵とともに挟み撃ち作戦に出ることもある。この戦術は、後述のように、古代ローマのフロンティヌスやウエグティウスも重視している。

敵側に寝返ろうとして逃亡する兵たちを、巧みに敵との戦闘に入らせ、漁夫の利を得た事例もある。「[マケドニア長官] ルックルスは、味方のマケドニア騎兵数騎が敵側に脱走したのを目にして、即座に突撃ラッパを吹かせ、残る兵士たちに彼らを追うよう命じた。そのため、敵方は、ルックルスが戦闘を開始したものと思ひ込み、マケドニア騎兵を素早く迎撃したため、逃走した騎兵たちは応戦せざるを得なくなった。」(233-234頁)

策略には、もっと汚い手もある。

「また多くの者は、都市を奪取するのに水に毒を入れたり、川の流れをそらせたりしたが、とはいえ近頃のは成功に至らなかったけれども。さらに籠城兵を簡単に降服させるには、彼らに勝利の見込みがないとか、新たな援軍によって彼らの形勢が不利なことを告げ知らせて、荘然自失に追い込むことだ。古代ローマの指揮官たちは、内部の者の買収と裏切りを通じて、あまたの都市を占領しようとした。それにはさまざまなやり方があった。ある者は部下の一人を送り込み、彼は逃亡兵ということで重宝がられて敵の信頼を取りつけると、この立場を今度は自軍に都合のいいように利用した。ある者はこの手口で警備隊の様子をつかむや、その知らせを介して都市を占拠した。」
(255-256頁)

このような卑怯な策略に訴えることも、使う人間の道徳性と矛盾しない、というのが古代人およびマキアヴェッリの思考であった。策略は、戦争での常套手段、日常事だったし、そもそもかれらは言動の矛盾をさほど気にしなかったからである。加えて策略は、味方の多くの生命を保全しつつ相手を倒せる点で、それ自体が人間味ある行為なのであった。

(4) 道徳・正義の尊重

軍事においては、指揮官の徳性が、武力に訴えることや策略によるよりも高い効果を上げることがある。「指揮官たちが民衆を味方につけるにはいろいろな方法があるものの、そのなかでも貞節と公正の例を挙げておこう。例えばヒスパニアの地でのスキピオ・アフリカヌスは、あの実に美しい娘を父親と夫の元に返している。このことは、武力でヒスパニアを獲得する以上のものをスキピオにもたらした〔後述〕。カエサルは、ガリアの地で自軍の周囲に防禦柵をこしらえるのに使った材木の代金を支払わせたところ、公正だとの名を馳せて彼はいとも簡単にその地方を手中にしたという」(234-235頁)といったものである。

裏切った者に対しても、それを知りつつも心底から人間味豊かに振る舞うことによって、相手の心をとらええた、人物の大きさの例もある。「包

囲まれる側としては、自分たちの中の疑わしい者には注意を怠らないことが不可欠とはいえ、時に処罰と同じように褒賞を与えることでも安全が確保できるものだ。マルケルスのことだが、ルキウス・バンティウス・ノラがハンニバル支持に回ったことを知ると、〔逆に〕実に人間味豊かに気前よくルキウスを遇して、彼を敵ではなく無二の友となしたのだ」（255-256頁）と。

これらの議論はけっして欺瞞論・偽善の勧めではない。マキアヴェッリの指揮官は、策略を行使する一方で、また高い道徳性を示す人たちでもあった。指揮官は、両者の資質を併せもっている以上、自然な気持ちでその高い道徳性に従って行為したのもあった。それが結果的には、武力に頼るよりも大きい効果をもたらした、ということなのである。われわれはマキアヴェッリをめぐる既成観念を排して、道徳、マキアヴェッリズム、暴力性のこの共存に注目しなければならない。

以上を、まとめておく。『戦争の技術』の名宛人は、第一には、戦争に備える政治のリーダー、第二には、戦闘現場での指揮官である。かれら向けのリーダーシップ教本という点で、『戦争の技術』は、『ディスコルシ』や『君主論』、『カストルッチョ＝カストラカーニ』と役割が変わらない。

戦闘の技術としては、友、敵、戦場に対するリアルな見方とともに、策略も登場する。策略としては、敵を欺いたり、敵の不注意に乗じたり、毒を使ったり、川の流れを変えたり、心理戦に訴えたり、裏切りやスパイを使ったりする手がある。リーダーたちの思考は、合理的でかつ柔軟であり、自軍と敵軍、置かれた場をリアルに観察し、知性を働かせ、場合によっては策略や暴力をも駆使しながら、効果的に戦った。

マキアヴェッリは、他面で、古代ローマの共和国軍の高い徳性や、質実剛健さ、紀律の高さ、愛国心などを評価する。古代ローマでは、公益を第一とする善いリーダーが輩出し、市民を統合し、市民の武装から成る強い軍隊を編成し、それによって戦争を有利に展開していった。また、自由と規

律の共存を可能にするすぐれた法律がつくられ、その下で市民は、自由であるとともに公共心ある市民として、共同生活を送っていた。社会は独立自営の農民中心で、人びとの暮らしは質実剛健であった。この農民たちが、市民軍の中核を成していた。リーダーたちは、勇気、正義、不動心の四元徳を体質化していた。かれらはそうした徳ある人格性によって、兵士たちから尊敬され、軍隊の団結を確保し、味方を増やし、政治を善い方向に向かわせた、と。

またマキアヴェッリは、上記古代ローマについても、マリウス、スッラやカエサル以降、職業軍人化が進み、私益が公益に優先されるようになって政治と軍事は高貴さを失い、共和国は崩壊していった、と批判的に見てもいる。

以上の点で、『戦争の技術』には、道徳と非道徳との、理想主義とリアルな見方との、まじめな同時追求、共存（雑居）が見られる。ここでのマキアヴェッリは、「政治と道徳の分離」を進めているわけではなく、伝統を冷笑するシニシズムの人でもなかった。「古代のリーダーたちに学ぶ」のこの姿勢で、古代の複合知を今日に生かそうとすることは、後述するように『君主論』、『ディスコルシ』の姿勢とも変わらない。『戦争の技術』は、こうした点で、マキアヴェッリの思想理解に欠かせない作品なのだ。

第3章 『君主論』——君主のモデルは誰だったか

『君主論』(*Il Principe*) は、君主を中心対象として、政治的リーダーの心構えを説いた本である。マキアヴェッリは、この本を、失脚して隠遁したサンタンドレア村の山荘で1513年に書いた。死後5年目の1532年に出版されるまでは、手写本で読まれていた。

『君主論』は、三つのテーマ群に分かれる。第1章から第11章までは、君主国を成立事情のちがいで分類し、それぞれの特徴について論じている。第12章から14章までは、軍隊の種類、軍備に関する君主の任務（訓練

を含む)を論じている。第15章から26章までは、君主が統治する際に心得るべきことがらを論じている(このうち第26章でマキアヴェッリは、外国からのイタリア解放を情熱的に呼びかけている)。この本は政治の書として通用しているが、軍事が重要な位置を占めていることも、見逃してはならない(第12章から14章までの他、第15、16、17、19、20、21章が、とくにそうである)。

『君主論』の性格を考えると、それが出版後27年目の1559年頃に、教皇庁から発禁本とされた事実が重要である。『君主論』にはその誕生期から、反道徳、「悪の教科書」のイメージがつきまといってきたのだ。このイメージはその後ますます強まり、道徳重視の立場から『反マキアヴェッリ』と題する本を1740年に出版した、プロイセンのフリードリヒ大王のような君主も出た。マキアヴェッリの祖国愛や共和主義を評価する論調が出てきたのは、やっと18世紀末のフランスでのモンテスキューやルソー、19世紀初頭のドイツのフィヒテやヘーゲルらからである。今日においてもマキアヴェッリは、シニカルな、かなりうさんくさい人物としてある。

その際、この「悪」のイメージを支えてきたものの一つが、『君主論』の君主のモデルはチェーザレ＝ボルジアだとする見方である。確かに若きマキアヴェッリは、教皇軍司令官のチェーザレに直接接し、その戦術と冷酷な政治手腕に深い感銘を受けた。この事実を踏まえて、マキアヴェッリは『君主論』をこのマキアヴェッリスト的なチェーザレ像から得たインスピレーションによって、チェーザレを念頭に置いて書いた、とする見解が支配的である。チェーザレ自身の姿も、『君主論』がかれの上面に落とす反道徳の影によって、暗く描かれてきた。『君主論』を「道徳的政治論の永い伝統と決別した、斬新なリアリズムの本だ」とする見方も、このチェーザレという「新タイプのリーダー」と結びつけることで増強されてきた。

加えて、次のことがさらに関わってくる。チェーザレが司令官に抜擢され活躍できたのは、強欲で品行が悪かった父ロドリゴが、贈賄を繰り返して教皇となっていたからである。ロドリゴは、「教皇アレッサンドロ6世」となってからも、金と色にまみれ、かつ軍事・政治においてはマ

キアヴェッリズムを濫用し、「史上最悪の教皇」と評された。チェーザレの母親は、娼婦だった。彼女は、その性的魅力で聖職者ロドリゴを虜にしたのだ。美貌で有名な、チェーザレの妹クレツィアにも、性的放縦や背信の噂が絶えなかった。このようにボルジア家全体にも、背徳、権力欲、暴力・殺人、マキアヴェッリズムのイメージがつきまとっていた。『君主論』の反道徳の背景としては、このボルジア家もよく引き合いに出される。

しかしこのボルジア＝モデル説は、改めて検証すると、次のような疑問点にぶつかる。

第一に、そもそも『君主論』でチェーザレが論じられている箇所は、多くない。確かに第7章においては、かれはきわめて詳しく論じられており、マキアヴェッリの感激ぶりがうかがわれる。しかし『君主論』の論点は数多く、それらが各章ごとに扱われているのに、他の章ではチェーザレについては第13章、17章、26章等で短い言及があるだけである。

第二に、論じられている箇所がなぜ少ないかと言えば、それは次の2点と関係する。

①チェーザレは、政治・軍事の舞台に上ったあとの4年間（1499-1503年）は、華々しい戦功を挙げた。しかしかれはまもなく、父と時を同じくして重病にかかる。そして父の死によって支柱を失い、消えていった。マキアヴェッリのチェーザレ讃美は、チェーザレのこの短期間における軍事・政治行動中心である。国の治め方（政治）に関連させて、すなわち君主論の中身に関係して評価するには、経過と結果を長い目で観察する必要があるが、4年はそれには短すぎた。実際チェーザレ評価は、かれの統治の中身には及んでいない。

なるほど、チェーザレの政治技術の事例も、書かれてはいる。例えばかれは、部下のロルカに命じてロマーニャ地方の支配を強引に進めさせた。しかしそれによって民衆の不満が昂じると、ロルカに全責任を負わせて処刑し、その惨殺死体を町の広場にさらした。チェーザレはまた、かれに突

如反旗を翻した幹部4人を、策略によって一気に殺害した、と。しかしこれらも、平常の政治、統治・行政の中身には属さない。

②上記の行状からも分かるように、チェーザレは独裁者（当時の言葉では「僭主」）タイプである。あとで詳しく見るように（第4章3-(5)）、マキアヴェッリは僭主を嫌悪する人である。したがってチェーザレはそもそも、全体としてはマキアヴェッリの理想の君主たりえない。

マキアヴェッリには、実際にはかれが多面的に見ているのに、その一面でしかないことを、「○○とは、こういうものだ」と断言的に書く傾向がある。それゆえマキアヴェッリ理解のためには、それら言説の扱いに注意することが欠かせない。

それでは、『君主論』の君主の本当のモデルは、誰だったか。『君主論』を先入観なしに読むと、たいいてい重要な箇所に出くわすのは、古代の軍事・政治リーダーたちに対するマキアヴェッリの讃美である。マキアヴェッリは、古代人の徳性や正義も高く評価している。先に『戦争の技術』で確認した古代人讃美が、『君主論』でも確認できるのだ。この点を踏まえて『君主論』を読み直すと、マキアヴェッリは、古代人の、軍事・政治上の徳（civic virtue）、策略、軍事・政治の技に強く印象付けられ、それらを念頭に置いて『君主論』を書いた、と見える。

『君主論』第7章におけるチェーザレ讃美も、このような古代人の理想の特徴を今の時代においてチェーザレに見い出したことに起因する。こう見てこそ、第7章でのチェーザレが実際には冷酷・策略の観点からだけでなく、その高い伝統的徳性の観点からも賞讃されている点が理解できる。

『ディスコルシ』に関しては、「古代のリーダーたちに学ぶ」の姿勢がはっきり出ていることが古くから指摘されてきた。それゆえ、⁽³⁾『ディスコルシ』中のとりわけ重要な主張が『君主論』にも見られ、かつそこでも古代

(3) たとえばマルセル＝ブリヨン『マキアヴェッリ』（生田耕作・高塚洋太郎訳、みすず書房、1966年）第4章。

のリーダーたちを引き合いに出しつつ議論がなされていることが確認できれば、『君主論』の本当のモデルが、ボルジアでなく、古代のリーダーたちであることが明らかになる。

『君主論』を古代人に着目して読むことによって始めて、マキアヴェッリの思想のルーツ、『君主論』がルネサンスのまっただ中で書かれたことの本当の意味（古典主義の重要性）や、『君主論』の中にも道徳尊重や、古代以来の西洋の伝統の継承が多く見られることの意味、さらにそうした点と他方でのマキアヴェッリズムや政治のリアルな見方とが相互にどう関係しているかの問題、『君主論』と『ディスコルシ』の重なりなど、マキアヴェッリ理解のためのカギが獲得できるのである。以下、この作業を進めよう。

周知のように『ディスコルシ』と『君主論』は、同じ頃に並行して執筆された。そうした両著が内容的にも重なることは、マキアヴェッリ自身『君主論』の第2章で、「共和国のことは別のところ『ディスコルシ』」でながながと論じたので、その論述は省かせていただく。ここでは、君主国に限ることにして、いま述べた区別を軸にして、論議をくりひろげることしよう。そして、君主国はどのように統治し、維持したらよいかを論じてみよう」と証言している。リーダーに対して「国はどのように統治し、維持したらよいか」を教える点が、両著で共通テーマだとも語っているのである。

まず、『ディスコルシ』中に出てくる、「古代人に学べ」を見ていこう。『ディスコルシ』では、古代人讃美や、(古代人に照らした) 同時代人批判の立場が鮮明だ。マキアヴェッリは作業の基本を、かれの時代の人びとに古代人を模範として示し、反省を促すことに置いた。この点で『ディスコルシ』もまた、一種の『君主論』としてある。このことは、古代人の美徳を高く評価する、『ディスコルシ』第2章のはしがきの、次の箇所から明らかである。

「私が古代ローマの肩を持ちすぎて、今日の世界をやっつけるようなことを以下の論議で展開でもしようものならば、この私自身もまた、思い違いをしている仲間の中に数えられてしまうかもしれない。

確かに、古代は力量が支配していたのに、現代は悪徳が横行していることが太陽を見るより明らかなことでないならば、私が非難した例の連中と同じような失敗を私自身が重ねないように、もっと自制して話を進めるべきであろう。しかし、このことは、誰の目にも明白な事実だから、この二つの時代について私が考えていることを率直に述べておくことにしよう。そうすれば、私のこの著作を読む青年が幸運にも好機を掴んで世の指導にあたるときに、現代の悪風に染まらないようにそれを避けて通れるだろうし、また古代の優れた点はこれを鑑として、取り入れることも可能だからである。」

「古代人に学べ」が、『ディスコルシ』において個別問題ではっきり出ているのは、次のような箇所においてである：

(a) 第 1 巻の冒頭 (はしがき) でマキアヴェッリは、かれの時代のリーダーたちが古代の軍事・政治の模範から学ぼうとしないことを、「ところが、共和国を整備し、王国を統治し、市民軍を編成し、戦争を指導し、隷属民を導き、さらに国土を拡張することになると、君主にも、共和国国民にも、これらの点を解決するのに、古代の先例に救いをもとめようとするようなものは、誰として見当たらないのが実情である」と批判する。文人が過去に範例を求めるのは、古今東西共通ではある。しかしこの箇所でマキアヴェッリは、同時代人が学ぶべき対象を古代人の軍事と政治の先例であると、それを学ぼうとしないことを批判している。

(b) 第 2 巻 13 章でマキアヴェッリは、古代ローマが建国を進めていく過程上では、軍事と政治とにおける策略が不可欠だったと見、今日においてもその活用が重要だと説く。

「君主がその身を起こす際に、どうしても用いなければならない方法は、共和国にとっても用いなければならないものである。つまり、その国が強大になって、独立自主の地歩を確立できるようになるまでは、〔君主国、共和国

を問わず] 術策を弄することもやむをえない。ローマも大をなすためには、情勢のおもむくまま、あるいは自ら進んで、すべての有効な手を打ったのだ。しかもこの場合、策略をめぐることをためらうようなことは、決してなかった。ローマは、建国当初、すでに説明しておいたような、同盟を結ぶというあのやり方以上には、悪どい策略をめぐることはなかった。つまりローマは同盟の名を借りて、加盟国を自国のもとに隷属させたのである。」

策略の活用、すなわちマキアヴェッリの政治論の代名詞のような「マキアヴェッリズム」もまた、上にあるようにかれが古代ローマから学び取ったものだったのだ。かれは古代ローマを、この点で同時代の君主と共和国との手本になる、と考えた。上述の「同盟の名をかりて、加盟国を自国のもとに隷属させた」、ローマの「悪どい策略」は、典型的な政治上の策略、すなわちマキアヴェッリズムである。このことのもつ意味は、本章でのちに扱う。

(c) 第2巻23章でマキアヴェッリは、古代ローマが周辺の諸都市を征服していった際に、その征服した都市の扱い方については中途半端さを避け、都市の性格に応じて、消滅させるか市民権を与える処遇をするかの二者択一をとったとし、この断固たる姿勢こそがローマの成功の基礎をもたらしたと評価する。このようなきっぱりした姿勢は、後述するようにマキアヴェッリの基本姿勢でもあった。その際かれは、「さて、この場合元老院が下した決定は、まことに注目に値する。そして同じような立場に置かれた君主なら誰でもこれを模範とするに足りるものなのである」と述べている。古代ローマ元老院の政治のやり方が、今日の君主の手本になる、と考えていたのだ。

次に、『君主論』中の「古代人に学べ」を、見ていこう。「古代人に学べ」は、『君主論』でも一般論として、以下のようにはっきり出ている。

(a) 第14章でマキアヴェッリは、君主が歴史書を読んで古代のリーダーたちから学ぶことが——狩猟を軸にした軍事訓練とともに——欠かせな

い、とする。

「君主は歴史書に親しみ、読書をとおして、英傑のしとげた行いを考察することが肝心である。戦争にさいして、彼らがどういう指揮をしたかを知り、勝ち負けの原因がどこにあったかを検討して、勝者の例を鑑とし、敗者の例を避けねばならない。とりわけ英雄たちが、過去に行ったことをそのままやるべきである。彼らにしても、それ以前に世人にたたえられた、誉れ高い人物を選んで、範としてきたし、先賢の武勲や行動を座右の銘としたのだ。

アレクサンドロス大王がアキレウスを、カエサルがアレクサンドロス大王を、スキピオがキュロス王を範としたと、噂されたようにである。さらにまた、クセノポンが著したキュロス王の伝記を読めば、スキピオがその一生をとおして得た栄光が、どれほどキュロス王の模倣に負うものであったかが知れよう。そしてスキピオが、どれほどクセノポンが描いたキュロス王に、誠実、心くぼり、人間味、寛容の面で似かよっていたかも窺えよう。

聡明な君主は、こうした態度をこそ守るべきである。平時にあっても、断じて安逸をむさぼることなく、この心がけを金科玉条として励み、逆境に立ったばあいにも、十分に生かせるようにしなくてははいけない。たとえ、運命が一変してしまったときでも、運命に耐えられる心構えがなくてはならない。」

ここで強調されている「歴史書」とは、文中に名が挙がっている「クセノポン」の本の他、古代の軍事・政治のリーダーの行動を記録した、ヘロドトス、トゥキディデス、ポリュピオス、プルタルコス、リウイウスらの歴史書のことである。マキアヴェッリは『君主論』のこの箇所でも君主たちに、それら古典を教科書にして軍事・政治を学べと言う。『君主論』もまた、古代人から軍事・政治を学ぶ姿勢を軸としている点で、一種の『ディスコルシ』なのだ。

(b) では、古代人のうちとりわけ誰を模範とすべきか。マキアヴェッリが挙げるのは、スキピオとキュロス大王であった。かれは『君主論』第17章で、「スキピオは、その時代のみならず、およそ世人の記憶にのぼる

すべての時代をとおして、じつに傑出した人物である」と言う。第14章では、このスキピオが、クセノポンの『キュロス伝』に描かれたキュロス大王を手本とすることによって偉大になった、と述べる。

その際マキアヴェッリは、これらスキピオとキュロス大王に共通の政治的徳性 (civic virtue) として、誠実、善意、人間味、寛大さを——すぐれた軍事的・政治の技法とともに——挙げる。『君主論』における君主も、これら古代の道徳・徳性を身に付けるべきなのである。後述するようにこれは、『ディスコルシ』とまったく同じスタンスである。

そしてここでも、戦争と政治は相互に緊密に結びついている。この点も、後で検討することとの関係で重要である。マキアヴェッリは、古代人から戦争のやり方を学べと言う一方、同時にかれらから「節制や善意、人間味、寛容」といった政治上の徳性を学べ、と言うのだ。

(c) 『君主論』第15章の、次の箇所は、ありもしない理想の国家や君主を論じるのではなく、実際の国家や君主に結びついて政治を論じるべきだ、という姿勢を打ち出している。

「わたしのねらいは、読む人が役に立つものを書くことであって、物事について想像の世界のことより、生々しい真実を追うほうがふさわしいと、わたしは思う。これまで多くの人々は、現実のさまを見もせず知りもせず、共和国や君主国のことを想像で論じてきた。しかし、人が現実に生きているのと、人間いかに生きるべきかというのは、はなはだかけ離れている。だから、人間いかに生きるべきかを見て、現に人が生きている現実の姿を見逃す人間は、自立するどころか、破滅を思い知らされるのが落ちである。」

「想像の世界のことより、生々しい真実を追う」、「役にたつものを書く」などと聞くと、近代の科学精神、ないし近代リアリズムの出現だ、現代のプラグマティズム思想の先駆だ、と反応する人も多いだろう。しかしマキアヴェッリの念頭にあったのは、上の文から分かるように、〈実際の出来事、歴史から学ぶ〉という、古来の常道である学び方だった。

「生々しい真実」とは、マキアヴェッリの時代の体験と、古代の歴史書を読んで得た史実とを指している。なぜなら上でマキアヴェッリは、「生々しい真実を追求こと」とは「実在の人物を論じ」ることだとしているのだが、この「実在の人物」とは、かれの同時代人と、古代の歴史に記録されているリーダーたちとを指すものだったからである。かれらの成功や失敗の経験から、同時代のリーダーに役立つ教訓を得て示すというのが、ここでの姿勢である。

実際マキアヴェッリは、この引用箇所に関係する第16-18章では、「人の実際の生き方と人間いかに生きるべきかということとは、はなはだかけ離れている」点の事例として、ユリウス2世、ルイ12世、フェルナンデス5世、教皇アレッサンドロ6世、ボルジアといった同時代人と並んで、カエサル、キケロ、アレクサンドロス大王、ウェルギリウス、ハンニバル、スキピオら古代人の生き方を扱っている。かれらが実際にどう生きたかを見るのが「どう生きるべきか」のヒントないし反面教師となるのである。そしてそうした範例は、『君主論』の全体にわたって古代人に関するものが圧倒的に多い。

『君主論』も『ディスコルシ』と並んで、リウィウスの『ローマ建国史』等の古典が描いた古代のリーダーたちの史実を基礎にして書く、という姿勢の結果なのだ。

以上を踏まえて、『君主論』と『ディスコルシ』の照らし合わせをおこなおう。『君主論』は体系書ではないから、重要な論点があればらに出されている。そこで以下では、マキアヴェッリの思想に関わる重要な15カ所を章立てに沿いつつ取り上げ、以下の i)~xv) で考察を加える。中心点は、古代の軍事・政治のリーダーたち、とりわけローマ共和国がその建国以来輩出してきた英雄たちと市民とが手本として重視されている事実にある。この点の考察でもっとも効果的なのは、『君主論』を『ディスコルシ』と照らし合わせつつ読むことであるので、そのかたちで論じる。

i) 『君主論』第3章の次の記述は、新しく成長していく君主国は周辺の弱小国をどう扱うべきかの問題を論じている。マキアヴェッリの結論は、次のようなものであった。

「ここでひとつ考えておくべきは、そうした弱小国にたいして、極端に大きな勢力や権限をもたせないようにすることだ。そうしておいて、自国の力とこれらの国の支援を得て、つぎつぎと強国を叩いていけば、文句なしにこの地域の覇者となれる。[...] ローマ人は手中にした属州で、この方策をよく守った。[...] こうしてローマ人は、このばあい、賢い君主であればだしもがすべきことをしたわけである。つまり、名君は、たんに目先の不和だけでなく、遠い将来の不和についても心をくばるべきであり、あらゆる努力をかたむけて、将来の紛争に備えておくべきだ。」

古代ローマが周辺の弱小国を扱ったやり方が、当世の君主の手本となる。小さな都市国家から出発した古代ローマは、まず周辺の諸都市を従属的同盟国にし、次にその力をも利用しつつ別の強い国に立ち向かいこれを倒し、「自分の他は弱小国」となった時点で、最後に周辺のその弱小同盟諸国を併合した。この手法にならうべきだ、と言うのである。イタリア統一への、戦略論である。

『ディスコルシ』第2巻4章は、この『君主論』第3章と同内容である。

「第二の方法というのは、他の国を同盟国とするやり方であるが、しかしながらこの場合には、同盟諸国への命令権を確保し、さらに連合諸国の中での優越した地位と、行動を起こす場合の指導権を手中に収めるようにしておかなければならない。この方法は、ローマ人が用いたものだった。[...] ローマだけがこのような方法を踏襲したのだから、大強国へと発展できたのがローマだけに限られたのも当然だった。」

強国になる唯一の道は、戦争で破った国を直接統治下において支配する（これでは軍事的に支配しきれない）のでもなく、平等な条件の同盟国として扱う（これでは自国だけを伸ばせない）のでもなく、従属的地位に置いた同

盟国にしてその力を利用することにある、と言う。古代ローマだけがこの道を取り、それゆえローマだけが上昇していった、と（第二次世界大戦後のアメリカの戦略を連想させる）。すなわち内容は『君主論』と同一であり、モデルである点でもそうであり、『ディスコルシ』で描かれた古代ローマ（元老院）が『君主論』においても君主の模範としてあることが分かる。

ii) 『君主論』第 6 章においては、「武装した預言者」ということばが有名である。ここでの「武装」の中身は、敵ないし反対者を制圧する実力（軍隊・警察）と、法律を制定しそれによって統治していく実力（統合力）のことであった。自分の力で政権をとった者は、それらを早急に確保することが欠かせない：

「だからこそ、武装した預言者はみな勝利をおさめ、備えのない預言者は滅びたのだ。それは、さきに述べた理由のほかに、民衆の気質が変わりやすいこと、そのことにもよる。つまり、民衆に何かを説得するのは簡単だが、説得のままの状態に民衆をつなぎとめておくのがむずかしい。そこで、人々がことばを聞かなくなったら、力でもって信じさせるように、策を立てなければならぬ。」

国内でも民衆の離反や反対派の成長は、必ず起きる。かれらは、法を破り、暴力に訴える。したがって、自力で権力を掌握した者は、早期に実力と法とを確保しなければならない。『君主論』第 12 章にあるように、「さて、昔からの君主国とか混成型の君主国と共に、新君主国をも含めて、すべての国の重要な基盤となるのは、よい法律としっかりした武力である。しっかりした軍隊をもたないところ、よい法律がうまれようがなく、しっかりした軍隊があってはじめて、よい法律がありうる」からである。

『ディスコルシ』第 3 卷 30 章は、この『君主論』第 6 章に対応している。

「こうして兩人 [サヴォナローラとソデリーニ] は、共に破滅の道をたどったが、二人の破滅の原因は、この嫉妬心を克服する策を知らず、また能力がなかったことによるのである。」

ここで「嫉妬心を克服する策」とは、マキアヴェッリによれば、第一に、人びとに危機意識を煽って嫉妬心を忘れさせること、第二に、嫉妬心をもっている者を力で抹殺・抑圧すること、第三に、人びとが嫉妬心にかかられて行動に出ることのないよう、規律・制度を確立することであった。このうちの第二・第三点が、『君主論』の上記箇所に出ていた点である。第3巻30章は、この暴力について次のように論じている。

「次に、嫉妬心を消すもう一つの方法は、暴力によって、あるいは自然の成り行きから、名声や権力の追求をめぐる君の競争者だった人びとを滅ぼすことである。[...] 頭を働かせて聖書を読む人は、モーゼが自己の法律と制度とを確立しようと願ったこと、またそのために、彼が数知れない人間をやむなく殺したことをおぼえておられるであろう。彼の手にかかった人間とは、嫉妬のためにモーゼの計画に反対した人にほかならなかった。」

聖なる預言者モーゼですら、嫉妬心にかかられて政敵となった者を、必要な場合には暴力を行使して抹殺したのだ。マキアヴェッリはまた第1巻9章でも、「これまで私が述べてきたことを裏付けるために、モーゼや、リユクルゴス、ソロン、その他の立法者たちの例をいくらかでも引くことができる。これらの人物は、彼らが〔絶対的な〕権力をもっていたからこそ、社会の利益を主眼とした法律をうちだすことができたのであった」と言っている。

古代の偉大な建国者たちが政敵を排除するために行使した史実のイメージが、『君主論』に出てくる「武装せる預言者」のモデルとして働いているのは、ここから明らかである。

iii) 同じ『君主論』第6章でマキアヴェッリは、有徳の君主として、次のような古代のリーダーを挙げ、自力で政権を取った今日のリーダーはかれらを模範にすべきだ、と言う。

「賢い人間であれば、先賢の踏んだ足跡をたずね、並はずれた偉人をこそ、つねに範とすべきであろう。それは、たとえ自分の力量がその域には達しな

いとしても、せめてその人物の残香にあずかりたいと思っただけである。[…]
 ここで、好運とは無関係に、自分自身の力量によって君主になった人間に想いをはせると、とくに卓越した人物としてモーセ、キュロス、ロムルス、テセウスなどの、王たちが浮かぶ。[…] つぎに、それぞれ国を征服したり国を築いた人物、キュロス王などについて考えてみれば、彼らがいずれ劣らざりっぱな王だということが知れよう。それに、彼らの個々の行動や方策を考えあわせると、偉大な導きの師（天主）をもったモーセと、それほど齟齬があるようにも思えない。」

モーゼらが「りっぱな王」として後世の模範になるのは、かれらが政治・軍事にすぐれていたうえに、道徳を尊重し、自分のことでなく人びとのこと、私益でなく公益を考え、自己犠牲的に尽くしたからである。公共心あるリーダー（と市民）こそ、マキアヴェッリがもっとも求めるところである。『君主論』がシニカルな本だと思っている人は「おやっ」と思うだろうが、ここには偉人たちを尊敬する素直な態度、心底からの古代リーダー崇敬が見られる。

『ディスコルシ』第3巻20章は、この『君主論』第6章と同内容である。ここでもキュロス大王の有徳性が次のように高く評価されている。

「立派な人たちが示した気風を、どれほど民衆が期待し、またどれほど著述家、つまり君主の一生を描き君主の生き方の規範を立てる著述家が褒め称えているか、周知のとおりである。こうした著述家の中でも、クセノポンはきわめて熱心であって、とくにキュロス王の人間味あり慈愛あふれる態度がどれほどの名声をもたらし、幾度となく勝利を導き、立派な評判を呼び起こしたかを論証しようとしたのである。また彼は、キュロス王は傲慢、非道、ぜいたくなど人びとの生涯の汚点となる悪徳は自戒して、後世に悪例を残さないように努めたと解説した。」

ここでマキアヴェッリは、君主はキュロス大王のように「人間味あり慈愛あふれる態度」によって民衆から慕われる、道徳的に卓越した者でなくて

はならない、と述べている。『ディスコルシ』でも、キュロス大王らの古代人が、君主の第一級のモデルなのである（モーゼについては本稿41頁、ロムルスについては49頁、スキピオについては52頁参照）。

iv) 『君主論』第7章は、チェーザレ＝ボルジアを詳細に扱っている。議論の長さからも、その中身からも、マキアヴェッリがボルジアに魅了され、リーダーのモデルの一人にしていることは、否定できない。かれは、たとえば次のように言う、「公〔ボルジア〕のすべての行動を回顧してみると、彼を非難することなどわたしにはできない。それどころか、前述のように、運や他人の武力で政権につくすべての君主が、ぜひとも鑑とすべき人物として、彼を推したいと思う」。

では、ボルジアのどこが模範となるのか。ボルジアは、「他人の武力または運によって」、すなわち他力でその座に着いた新君主の一人である。この種の君主にとってボルジアが模範となる第一の理由は、デビュー後、早急の地盤固めを、武力・残虐・策略、マキアヴェッリスト的外交によって着々と進めたことにある。

「敵から身を守ること、味方をつかむこと、力、あるいは謀りごとで勝利をおさめること、民衆から愛されるとともに恐れられること、兵士に命令を守らせて、かつ畏敬されること、君主にむかって危害におよぶ、あるいはその可能性のある輩を抹殺すること、旧制度を改革して新しい制度をつくること、厳格であると同時に、丁重で寛大で闊達であること、忠実でない軍隊を廃止し、新軍隊を創設すること、国王や君侯たちと親交を結び、あなたを好意的に支援してくれるか、たとえあなたに危害を加えようとしても二の足を踏むようにしておくこと」(第7章)

ここに賞讃されていることがらのポイントは、「力、あるいは謀りごとで勝利をおさめること」や「君主にむかって危害におよぶ、あるいはその可能性のある輩を抹殺すること」にある。これらは、確かに冷酷・非道さを意味する。早急に基盤を固めるには、そうした暴力と策略・マキアヴェッ

リズムが欠かせない。

第二の理由は、上の引用箇所にあるように、ボルジアが高い徳性の人であったことにある。すなわちかれは、「厳格であると同時に丁重で寛大で闊達であり、「民衆から愛され」、「兵士に命令を守らせて、かつ畏敬される」人物だった。マキアヴェッリはボルジアに、「冷酷非道のマキアヴェッリスト」のイメージとは異質な面があることを見通していたのだ。

ところで、上の引用箇所にある、武力と策略の行使、敵対しそうな者の抹殺等は、既述のように『ディスコルシ』が強調するところの、古代ローマ人の常套手段だった。『ディスコルシ』の他の箇所、たとえば第 2 巻 3 章にも「ローマが強国に成長したのは、周囲の国家を破壊したと同時に外国人にも簡単に市民権を与えたからである」とあった。ここでの「破壊」が、暴力性に対応している。ちなみにここでローマ人が「外国人に市民権を与えた」とある点は、上の引用箇所でもボルジアについての「寛大で闊達であること」に対応する。

しかも、ボルジアのこの冷酷・非道さには、『君主論』第 17 章と『ディスコルシ』第 3 巻 21 章とにともに扱われているハニバルの姿が重なっている。これは後述する。またマキアヴェッリは『君主論』第 19 章で、アフリカ出身で非エリートでありながら、政敵や反対派の元老院議員を策略と暴力で次々と殺害して急速に上昇していった、ローマの皇帝セウエルスについて、「セウエルスからは、国の基礎づくりをするうえの肝心な方策をしっかりとつかみ」とらなくてはならないと言う。それゆえセウエルスも、マキアヴェッリズムや暴力で権力を取り、それによって地盤固めをした点で、ボルジアに重なる。マキアヴェッリは、『ディスコルシ』ではセウエルスを、この手法を活用した点で「極悪人」と呼ぶ（第 1 巻 10 章）。だとしたら同じ手口を使ったボルジアも、「極悪人」となるだろう。

次に、上の第二の点、「寛大で闊達」で「民衆から愛され」兵士からは「畏敬される」ところの有徳性は、マキアヴェッリが『ディスコルシ』で古代の英雄たち、モーゼやキュロス大王、さらにはスキピオ、ウァレリウ

ス＝コルウィヌスなどローマのリーダーたちに見出していた諸美德でもある（これについては、すぐ後のv)で述べる）。

以上からは、次のように言えるだろう。『君主論』の献辞にあったように、マキアヴェッリは前から、「古代の事柄について平素かかさぬ読書」を重ね「偉人の行ない」を学んでいた。かれはそれらからのインスピレーションによって、まず『ディスコルシ』を書き始めた。その途中で『君主論』に移った時も、古代人からのインスピレーションをもとにしてこの本を書いていった。この『君主論』執筆作業が第7章に来たときに、かれはボルジアを、その行為態様が古代のすぐれたリーダーたちと似ていたがゆえに、リーダーの模範の一人に入れた。すでにマキアヴェッリが1502年にボルジアに出会い感激したのも、マキアヴェッリはボルジアの内に、親しんでいた古代人のイメージを見出したからだろう。

〈マキアヴェッリは無前提に、まずボルジアに会ってかれに感銘を受け、そのインスピレーションで『君主論』の全体を書いた〉という通常理解では、『君主論』の多くの重要メッセージがボルジアに言及せずに書かれていることが説明できない。同時期の『ディスコルシ』との『君主論』の近似性も、両書がともに古代ローマの軍事と政治の歴史を踏まえつつ書かれていった事実を踏まえないと理解できない。

v) 次に、マキアヴェッリは『君主論』第9章において、市民の支持で君主となった者がその座を確保するうえでは、下記のことが大切だと言う。

「君主が民衆のうえに土台を置き、しかも指導力があり、果敢な人であって、逆境にあってあわてふためくこともなく、準備万端おこたらずに、その剛毅さと適切な措置によって衆人の心を惹きつけていけば、けっして民衆にあざむかれることはないはずである。きっと確固たる基礎が固まったと見られるだろう。」

徳性が高いため民衆から尊敬され、善政によって民衆から支持を受けつ

つ、威厳と規律とによってかれらを引っ張っていける君主であつてこそ、その座を維持できる、と言うものである。

マキアヴェッリはまた、『君主論』第21章で、人びとから尊敬されるためには、君主が「なによりも大事業を行ない、みずから類いまれな手本を示すこと」が肝要だと言う。この事例としては、武力でスペイン統一を成し遂げたフェルナンド5世を挙げている。また別に、ベルナボ=ウiskonティがおこなった、はでな賞罰の事例をも挙げる。他方、手本を示すとは、おりに触れて民衆との会合をもって「自身の豊かな人間味と度量の広さを」（同章）示すことである。かれはこの関連で、古代ローマの五賢帝の一人マルクス=アウレリウスを、「多くの美德を一身にそなえ、人に敬われて、存命中は両者（兵士と人民）の勢力範囲を一定にとどめ、一度も恨みを受けたり、侮られたりしなかった」（第19章）と高く評価する。

『君主論』においても、君主がその力能、人格の高さと善政とによって臣下・臣民と一体の関係にあるような政治こそ、マキアヴェッリの理想とするところだった。そしてかれは、その具体像を古代史上のリーダーたちに見出した。

『ディスコルシ』第1巻10章は、『君主論』のこれらの章と同内容である。ここでもマキアヴェッリは、尊敬される君主のモデルを古代ローマの五賢帝たち（上記のマルクス=アウレリウスはその一人である）に見出していた。

「君主たるものは、ネルワからマルクスに至る時代の中に自分を置いて、それをさむ前後の時代とひき比べてみるがよい。そしてさらに、どちらの時代に生まれたいか、どちらの時代の統治をしたいかを選んでみるがよい。[...] というのは、賢帝たちのもとで統治されている時代には、支配者は幸せな生活を送る臣下に取り囲まれており、その治世は平和と正義に満ち溢れているのが見られるからだ。また元老院は、その権威を掲げ、もろもろの行政の任に当たる者は、その誉れも高く、富裕な市民は、それぞれの富を楽しむことができた。そこには気品にみち、美德に溢れ、そしてすべてが平和と

幸福にひたりきっているのが見られるであろう。ところが、それ以前の時代には、様々の恨みや放縦や腐敗墮落と野望が渦まいていた。」

以上からも、有徳の理想的君主のイメージが『君主論』と『ディスコルシ』で同じであることが確認できる。先入観なしに素直に読めば、ここでもマキアヴェッリが——今日支配的なマキアヴェッリ像とは正反対に——すなおな常識的政治道徳論者でもあることが分かる。

西洋には古代ギリシャ以来、「君主鑑」の伝統がある。有徳な君主こそがその善政をつうじて臣民をも善導し幸せにする、との思想である。マキアヴェッリは、この徳性重視の伝統を——通説が言うようにはシニカルにあざ笑う人ではなく——一方ではまじめに継承する人だった。

もっとも、他方では、この点に関して一つの補足が必要である。君主鑑の伝統といっても、一様ではなかった。とくにクセノポンの『キュロス伝』（最初の君主鑑の一つ）では、第一に、後述するように中世の君主鑑とは異なって、君主が政治だけでなく軍事の現場でのリーダーでもある。第二に、したがって君主には、高い徳性ととも、策略・軍事技術・もののリアルな見方もが求められている。マキアヴェッリは、この『キュロス伝』にとりわけ影響を受けた。それゆえかれは、『キュロス伝』に見られた、政治論の理想主義・有徳論と、軍事の伝統であるマキアヴェッリズム・もののリアルな見方と徳性の尊重との共存とを——中世の君主鑑とは異なり——古代風・クセノポン風の態様で再現させたのである（リウウス『ローマ建国史』等もまた、リーダーたちの行状を同じような態様で描いている点で、一種の君主鑑——『キュロス伝』と並ぶ——である）。

vi) 『君主論』第15章の次の箇所には、マキアヴェッリズムが出ている。

「しかしながら、一つの悪徳を行使しなくては、政権の存亡にかかわる容易ならざるばあいには、悪徳の評判など、かまわず受けるがよい。というのは、よくよく考えてみれば、たとえ美徳と見えても、これをやっていくと身

の破滅に通じることがあり、たほう、表向き悪徳のようにみえても、それを行うことで、みずからの安全と繁栄がもたらされるばあいがあるからだ。」

人びとはこれまで永らく、ここだけを拾い読みして、「目的が手段を正当化すると赤裸々に言っている点で、マキアヴェッリは、近代的に醒めている」と見てきた。しかし上の引用文中にあることは、古今東西、軍事では当然視されてきたことである。軍事の場では人は、自軍の存亡に関わる事態下であって、勝つために殺人を含む暴力、策略、約束破りなど反道徳の戦術をも使って戦う。これが、戦術論として体系化されてきたのであり、かつこの戦術論の技法は、政治の場でも活用されてきた。リウィウスらの歴史書は、これら軍事・政治のリーダーたちの行動様式を記録したものだ。

上の引用箇所でもマキアヴェッリは、この軍事・政治の長い伝統を踏まえて書いている。実際、この中身は、リウィウス『ローマ建国史』が描いた古代ローマ人らの軍事行動の特徴としても見られた。マキアヴェッリは、これらを学び取って『ディスコルシ』に著し、さらには『君主論』や『戦争の技術』でも展開したのだ。⁽⁴⁾ 上述の「悪徳の行使」についても、このように古代の歴史書や軍事の書を踏まえた広い視野で読まないで、「近代的思考だ」としか見ないアナクロニズムに陥る。

この点を詳論しよう。前述の「悪徳を行使」することとは、①暴力に訴える、②策略に訴える、③約束を破る、のいずれかを実行することである。

(4) リウィウスの『ローマ建国史』は、マキアヴェッリの父親の蔵書中の1冊であり、製本のし直しを受けており、若きマキアヴェッリも親しんだと思われる。1503年の論文「キアナ渓谷地方の反乱の処理について」には、その勉強が濃く反映している。ここでかれは、アレツォーなど反抗する都市には断固たる処理をとれと、リウィウスが描く古代ローマが採った常套手段を出しながら主張しているからである。『ローマ建国史』は、『ディスコルシ』、すなわちかれが最初に書き始めた作品のテーマであり、かつその処女作のかたちをも規定している。すなわち『ディスコルシ』は142の章から成るが、これは『ローマ建国史』の総巻数142と同数である。

①暴力の行使について マキアヴェッリによる軍事・政治と暴力の関係づけは先にも見た。ローマの他国支配の仕方（『君主論』第5章）や、「武装した預言者」論（『君主論』第6章）、ボルジア論（『君主論』第8章）においてである。これらと同様な議論は『ディスコルシ』にも、見られた。この点は、後でも論じる。ここでは、暴力行使の基本原則について論じた『ディスコルシ』第1巻9章を見ておこう。マキアヴェッリは、ロムルスが古代ローマの単独王となる際に双子の弟レムスや、共同統治者のサビニ王タティウスを殺害したことについて、立派な人物が立派な目的（国家統合）のために暴力に訴えるのは許される、として次のように述べる。

「その人物が王国を打ち建てたり、あるいは共和国を造るのに、どのような非常手段を取り上げようとも、道理をわきまえた人ならば、とやかく言うてはならないのだ。たとえ、その行為が非難されるようなものでも、もたらした結果さえよければ、それでいいのだ。ロムルスの例のように、もたらされた結果が立派なものなら、いつでも犯した罪は許される。」

これを逆に読めば、国家の建設・防衛を目的とした大事業の場合だけ、しかもロムルスのような無私の心でそれを担う人物だけが、暴力に訴えうる。「たんなる破壊に終始して、なんら建設的な意味のない暴力こそ非難されてしかるべきもの」なのだ。

ところで、マキアヴェッリは、『君主論』第18章で、「慈悲ぶかいとか、信義に厚いとか、人情味があるとか、裏表がないとか、敬虔だとか、そう思わせなければならぬ。また現実にもそうする必要はあるとしても、もしもこうした態度が要らなくなったときには、まったく逆の気質に変わりうる、ないしは変わる術を心得ている、その心がまえがなくてはいけない」と言っている。ここでマキアヴェッリが言いたかったことは、同じ第18章ですぐ後に出てくる、「したがって、運命の風向きと事態の変化の命じるがままに、変幻自在の心がまえをもつ必要がある。」と対応している。「必要にせまられれば、悪に踏みこんでいく」との判断ができる余裕をもつに

は、道徳的に振る舞うことだけに固執してはならない。マキアヴェッリは、この柔軟思考をここで強調しているのだ。

しかも「必要にせまられれば」とは、日常生活上よく見られる場面を想定したものではない。上に見たようにそれは、国家の建設・防衛のためという厳粛な局面を指している。拙著『政治の覚醒』第 1 部でも論じたが、マキアヴェッリの主張はしばしば限定付きのものなのである。それら限定を見落として、かれの片言隻語を短絡的に一般化してはならない。これまでのマキアヴェッリ論には、かれの片言隻語のそうした鵜呑みがきわめて多い。

ちなみに、上の「そう思わせなければならない」は、一見ショッキングな表現である。確かに、「悪人であれ。だが、善人だと思わせろ」というのであれば、偽善者である。しかし実際はわれわれはみな、「そう思わせ」るよう努めつつ生きているのではないか。われわれは、心底、善人であるわけではない。ただ、できるだけお互いに善人として振る舞いあうことを重ねつつやって来ているのだ。相手に嫌悪や邪魔臭さを感じていても、それを隠して紳士淑女的に対応する。人はみな、自分を善人だと「思わせ」つつ生きているのだ。常に本心を相手に隠さずに出しては、社会でやっていけない。マキアヴェッリが言うことは、実際にはそんなにショッキングなものではない。

②策略の行使について これは、『君主論』第 18 章との関係で後述する (55 頁)。

③約束破りについて これも、『君主論』第 18 章との関係で後述する (58 頁)。

vii) 『君主論』第 16 章は、第 15 章を踏まえて、「鷹揚^{おうよう}と吝嗇^{りんしやく}」について検討している。ここでマキアヴェッリは、君主は臣民の支持を得るためには鷹揚であるべきだとの常識を批判して、鷹揚であっては自国の財産を費消し、このため後で重税を課さなければならなくなり、かえって反発を招くとする。現代の福祉国家批判のようだ。この章では、かれの同時代人

の、ユリウス2世、ルイ12世、フェルナンデス5世が、吝嗇（けち）によって蓄えた財産で大事業を遂行し国を強化した模範として登場する。

しかしマキアヴェッリは、他方では、帝位を狙う人物や、大軍を率いて敵地で戦っているリーダーは鷹揚でなければならない、ともする。そうでないと、部下や兵士たちは付いてこない。しかも敵地においては敵から略奪した財産を味方に提供するのであるから、自分の財産を費消して弱化する事にはならない。この点に関してはマキアヴェッリは、カエサル、キケロ、アレクサンドロス大王を手本として押し出している。

このテーマについては、『デスコルシ』に対応する箇所はないが、上の記述から分かるようにこの箇所自体が、『君主論』でも古代人が一方の重要な手本であることを語っている。

viii) 『君主論』第17章は、第15章を踏まえて「冷酷さと隣れみぶかさ、恐れられるのと愛されるのと、さてどちらがよいか」を問う。マキアヴェッリは、前者の「冷酷さと隣れみぶかさ」の問題については、次のように答えている。

「どの君主にとっても、冷酷さなどでなく、隣れみぶかいと評されるほうが、望ましいことにちがいないと思う。そうはいっても、恩情にしても、へたなかけかたをしないように心がけなければいけない。たとえば、チェーザレ・ボルジアは、残忍な人物とみられていた。しかし、この冷酷さが、彼にローマ地方の秩序を回復させ、この地域を統一し、平和と忠誠を守らせる結果となった。[...]したがって、君主たる者は、自分の領民を結束させ、忠誠を誓わすためには、冷酷さなどの悪評をなんら気にかけるべきではない。」

マキアヴェッリはこの関連で、さらにハンニバルを挙げている。かれは、「無数の人種がまざりあった大軍を率いて、異境の地」イタリアで長期間、困難な戦いを続けたのだが、残酷さを伴ったそのリーダーシップによって、兵士間の内紛も指揮官に対する反乱も防ぐことができた。この点を踏まえてマキアヴェッリは言う、「いざ君主が軍隊を率いて、あまたの兵士

の指揮にあたる時、その場合は、冷酷などという悪名を、頭から無視してよい。こうした悪評が立たないように、軍隊の結束をはかり、軍事行動に備えることなど、けっしてできはしない。あのハンニバルの目覚ましい活躍には、このことも含まれている。」大軍を動かすような軍事行動においては、紀律がなによりも大切であり、そのためにはリーダーに冷酷なほどの厳格さも必要だ。ここでのモデルは、ハンニバルである。

『ディスコルシ』第3巻21章は、この『君主論』第17章にまったく重なっている。

「スキピオはスペインに入ると、人間味と慈悲とで、瞬く間にその属州全域を味方につけ民衆の崇拝と称讃とを受けるようになった。逆にイタリアに侵入したハンニバルは、まったく正反対の手段、つまり残虐、暴行、強奪をはじめ、ありとあらゆる非道を働きながら、スキピオがスペインであげたのと同じ効果をあげた。すなわち、すべてのイタリアの都市がハンニバルになびいて〔ローマに対し〕反対側につき、民衆もまたこれに従ったからのである。」

軍事行動中のリーダーには、「人間味と慈悲」でいく道と「残虐」の道とがある。前者がスキピオ、後者がハンニバルの道である。「人間味と慈悲」のスキピオについてマキアヴェッリは、『君主論』第17章で、鷹揚すぎて兵士の反乱を招いたと批判してもいる。厳格さも必要だった、との認識である。

加えてこの残酷さの効用論は、古代ローマ人の実績にもとづいている。『ディスコルシ』第2巻23章は、古代ローマが他の国を支配したときの残酷さを次のように論じている、

「なぜなら、政府というものは、その臣従している者に、支配者に思いのままに害を加えられないか、させてはならぬようにすることが本筋だからである。このためには彼らに対してあなた方を完全に安全にするように、支配者に刃を向けるあらゆる手だてを取り上げておくとか、あるいは彼らに、世の

中をひっくり返そうなどと夢にも思わせぬように、できるかぎり恩典を与えてちやほやしておくことである。」

「上記の〔ローマ人による、プリウエルヌム人への恩恵〕実例と、ラティウム人に対する〔断固たる〕取り扱いとを考えあわせて、次のような結論を出したいと思う。つまり、これまで勢いも強く、自主独立の生活にも慣れてきた人々を処分しなければならないときは、彼らを皆殺しにしてしまうか、さもなければ〔逆に〕、恩恵をほどこしてやるかしかない。」

古代ローマ人も、残酷な処理方法で秩序を確立させ、結果的に善い社会をもたらした。ローマ人のこういう措置をめぐってマキアヴェッリは、「このようなやり方は、諸君主のもって範としなければならないものだろう」と言う。すなわちこれも、古代ローマの支配態様が『君主論』の君主の模範となるという見方である。上記の、醒めた近代リアリズムに見えることがらも、それ自体は古代人の生き様から得られたものだった。ここでボルジアが取り上げられているのは、こうした古代ローマやハンニバル像に合致したからである。

では次に、上の後者、「恐れられるのと愛されるのと」どちらがよいか、についてはどう考えるべきか。マキアヴェッリは確かに『ディスコルシ』第2巻23章で、「愛されるより恐れられるほうがはるかに安全である」と明言している。このことばは、しかし実際には一般命題ではなく、「かりにそのどちらかを捨てて考えなければならないとすれば」という条件付きのものである。すなわちそれは、暴力や欺瞞を行使しなければやっていけない限界状況、イタリアに侵入したハンニバルが置かれたような状況に関わるものとして出されているのだ。

しかもマキアヴェッリは、『君主論』の他のいくつかの箇所では、君主が「愛されること」が大切だと強調してもいる。かれは、たとえば第19章で、「卓越した人物で、部下からも敬愛されていると知れわたった君主に、陰謀をたくらむのは難しいし、侵略など容易にできはしない」と述べてい

る。『君主論』第14章は、そうした愛される君主のモデルとして、スキピオとかれが手本としたキュロス大王を挙げていた（前述）。心から敬愛されるリーダーであってはじめて、部下は生死を共にしてくれる。恐れられるだけの存在である指揮官・君主は、危機に直面したとき兵士や臣民の決死の献身を期待できない（後述のスパルタ出身の傭兵軍隊長クレアルコス参照）。

また『君主論』第19章では、君主が人びとから憎まれない方法として、第一に、人びとを規正するのに「第三者の裁定役〔機関〕をつくって、国王が責任を負うことなく」処理する道があるとする。この道をとって「よく治められている国」としては、同時代のフランスがある（上級裁判所である高等法院が機能している）。第二には、君主が「謙虚な生活を送り、正義を愛し、残酷をきらい、人間味があり、憐れみ深く、人びとから愛され支持を固めて統治する道がある。この道を進みえた一人が、ローマの賢帝マルクス・アウレリウスだ。マキアヴェッリは、かれを高く評価し、「マルクスからは、すでにゆるぎなく安定した国を維持していくための」適切な方法をつかみとらなくてはならない、と結論付ける。

『ディスコルシ』も、この考え方を基底にしている。すなわち、その第3巻19章でマキアヴェッリは、一般的には次のようになるとする。

「戦争が彼ら〔ローマ人〕にのしかかると、クインティウスとアッピウス・クラウディウスに軍を委ねて国外に派遣した。アッピウスは苛烈、乱暴に指揮を執り、ために部下は彼の命令どおりに動こうとせず、敗北同然にまで追いつめられ、自分の支配の属州から脱出するという憂き目をみた。一方、クインティウスは人情に厚く人柄も利口であったので、兵士はよく帰順し勝利を得ることができた。この例からして、民衆を統御するばあい、威厳よりは人間味、厳しさよりは憐れみがいっそう大切であるように思われる。」

リーダーが人びとを統御するに当たっては、「人間味」、「憐れみ」の感情が欠かせない、とマキアヴェッリはここでも強調しているのだ。かれは別

の箇所でも、リーダーは徳性と部下に対する配慮と紀律尊重とによって部下から信頼され尊敬されていることが大切だとする、

「指揮官は、その慎重さが信頼のおける人物として尊敬されていなければならない。それには常に、兵士たちに彼が規律正しく、注意深く、しかも勇気のある人物であることを示し、威信のある地位にふさわしい名声を保っていくことが必要である。こういったことは、兵士たちの過失を処罰し、不必要に彼らを疲労させないようにし、厳格に約束を守り、勝つということがいかにたやすいものであるかを兵士たちに見せつけてやり、また、離れた所から見れば危険に思われることを兵士たちの目から隠したり、たいしたことではないと教えたりすることによって、実現できる。」（第3巻33章）

愛されていないければ、部下はいざという時に一緒に死んでくれず、逆に離反してしまう。

以上のように、マキアヴェッリについては、その「愛されるより恐れられるほうがはるかに安全である」などの片言隻語を、かれの作品全体から切り離して絶対化してはならない。日本には、マキアヴェッリの語録を重宝がる傾向がある。しかし語録には、上に見た危険が伴っている。下手な語録本には手を出さないこと、まともな語録本を使うときにでも、その言明が出てくる原典箇所の全体を自分で読み考えること、なによりも作品の多くを読み、かつ周辺書を読んでそこに位置付けることが、大切である。とくにマキアヴェッリのような、ショッキングな言辞——拾い読みでは誤解に陥る——を駆使して世の常識を破ろうとする人物に対しては、欠かせない。

ix) 『君主論』第18章でマキアヴェッリは、君主が策略を用いて相手を倒すことの重要性について、次のように述べる。

「君主にとって、信義を守り奸策を弄せず、公明正大に生きるのがどれほど称賛されるものかは、だれもが知っている。だが、現代の経験の教えるところでは、信義などほとんど気にかげず、奸策をめぐらして、人々の頭を混乱

させた君主のほうが、むしろ大きな事業（戦争）をやりとげている。しかも、けっきょくは彼らのほうが、信義に基づく君主を圧倒していることが分かる。ところで戦いに勝つには、二種の方策があることを心得なくてはならない。その一つは法律により、他は力による。前者は、人間ほんらいのものであり、後者は獣のものである。だが多くのばあい、前者だけでは不十分であって、後者の助けを借りなくてはならない。したがって君主は、野獣と人間をたくみに使いわけることが肝心である。」

「現代の経験の教えるところ」とは、『君主論』第 7 章にある、ボルジアが「力、あるいは謀りごとで勝利をおさめる」ことによってその支配を固めた点などに関わる。マキアヴェッリによるこの事例提示に出くわせば、「策略を活用することの提唱は、ルネサンスの乱世がもたらした政治手法だ」、「マキアヴェッリズムは、近代の政治的手法だ」と言いたくなるだろう。しかし実はこの策略も、以下のように古代のリーダーたちが常用していたものだった。マキアヴェッリは、それを踏まえているのだ。

策略重視は、『ディスコルシ』でも柱の一つである。第 2 巻 13 章の前掲箇所 (34・35 頁) は、政治と軍事において「策略」に頼る必要があるとし、リウイウスの『ローマ建国史』を踏まえて、そのような策略活用は国家が軍事で上昇していくために必要だとしていた。ローマは、「同盟の名をかりて、加盟国を自国のもとに隷属させ」つつ国を拡大していった、と。国際政治上の「悪どい策略」である。同じ第 2 巻 13 章でマキアヴェッリはまた、

「クセノポンはそのキュロスの伝記の中で、術策を用いることの必要性を示している。キュロスがアルメニア王に対して試みた最初の遠征は、策略に満ちたものであった。相手を欺くことだけで軍隊の力を借りずに、その王国を手に入れてしまった。クセノポンがこのことから引き出した結論は、およそ大事業を志すほどの君主なら、相手をたぶらかす術を体得するべきだということに他ならない。」

と言う。策略・マキアヴェッリズムは君主が軍事と政治とにおいて敵を制圧して自分を強化するために不可欠だと、ここでのマキアヴェッリは、クセノポンの『キュロス伝』を踏まえて主張しているのである。このキュロス大王をマキアヴェッリは、『君主論』第6章や第14章でも、みごとな策略を駆使した人として賞讃していたのだった。

策略は、敵に対してだけではなく、味方に対しても使う。第3巻33章は言う、

「ここでまた私は、ファビウスのとった方策にも触れないではいられない。彼は新たな兵力を率いてエトルリアに攻めこんだことがあった。彼は軍隊に自信を持たせることが、新しい土地で新しい敵に対抗するにはぜひ必要だと判断したのである。そこで自信をつけさせるために、兵士に向かって、戦闘についてあらかじめ次のように訓示した。実は確実に勝利を掴める理由はいろいろあって、話してもよいのだが、諸君に明きらかにしては危険であるから話さないでおく、と。策略もこれぐらい抜け目なくやれば、模範とすべきであろう。」

これも古代ローマのリーダーに見られる範例である。軍事というより政治的意志統一のための策略である。

以上からも、策略に関する『君主論』の重要命題は、古代人の軍事・政治の活動を観察するなかから獲得されたことが確認できる。そしてここからはまた、『ディスコルシ』で高く評価された、古代ローマの、戦争および政治における策略行使が、『君主論』における、君主の戦争と国内を治める術として使われていることを意味する。策略が発達していたのは軍事であるが、マキアヴェッリは上のところではその技術を政治に活用しているのだ。そもそも古来、マキアヴェッリズムは、軍事と政治を貫く共通思考によって機能してきた。

いわゆるマキアヴェッリズムは、マキアヴェッリないしその時代の権謀術数の現実が初めて提唱したものではない。それは既に古代ローマ人らが

駆使し、興味をもって記録化してきたところのものだった。それどころか策略は殺戮・破壊と並んで、古今東西において軍事行動の常套手段である。そして軍事と政治は、連続し不可分であるから、しかも両者は「友と敵の関係」を基軸にする点で本質を共有するから、人は古今東西、軍事において発達させてきたそれを、政治においても常套手段化してきた。マキアヴェッリは、軍事・政治のこの伝統上で、『君主論』でもマキアヴェッリズムを展開したのだ。

しかも古代ローマ人らにおいては、「一つの悪徳を行使」することは、「政治と道徳の分離」などといった哲学的思考を前提に駆使されていたものではない。またかれらは他方で、政治道徳や徳性をまじめに尊重してもいた。マキアヴェッリにおいては非道徳的手段の行使と数々の道徳的な言明とが両立している、ということの構造もまた、上の事実、古代人がそういう思考の人であったということ踏まえてはじめて、解明できる。

このように古代の歴史書や軍学書に没入し、古代人の行為態様を受け止めつつ論じているマキアヴェッリについて、そういうバックグラウンドを看過することによって、「マキアヴェッリは、ルネサンスの革新的政治、近代科学の思潮を反映させたことによって、古い政治学、それまでの伝統的徳論から決別しえた」、「かれが史上初めて、政治論を道徳論から分離した」、「マキアヴェッリズムは、近代人マキアヴェッリの発明品だ」などとするのは、剣ヶ峰をその直下の噴火口との関係で論じるだけの富士山論のようなものだ。「マキアヴェッリ富士」の裾野はその外を下方へ、考えられているよりはるかに遠くまで広がっているのだ。

x) 『君主論』第18章でマキアヴェッリは、事情によっては約束を破る必要があることを、次のように論じている。

「名君は、信義を守るのが自分に不利をまねくとき、あるいは約束したときの動機が、すでになくなったときは、信義を守れるものではないし、守るべきものでもない。」

これもしばしば、「新時代の政治の論理、マキアヴェッリズムの表明だ」とされてきた。確かにマキアヴェッリはこの事例として、教皇アレッサンドロ六世の盟約破りを挙げている。これは、新時代の事例だ。だが、アレッサンドロ六世は、とうていマキアヴェッリ作品のモデルになりうる人物ではない。では、この約束破りは、何を踏まえ、誰をモデルにしつつ述べられているか。

実は上の発言は、きわめて有名な古代ローマの史実に関係する。すなわちこれは、『ディスコルシ』第3巻42章「無理じいされた約束は守る必要はない」で取り上げられている、古代ローマ人のとった行動を念頭に置いたものである。執政官スプリウス＝アルピヌスに率いられたローマ軍が、サムニウム人を攻撃中、かれらに謀られてカウディウムの地の山峡に閉じ込められた。ローマ人たちは降伏し命と引き替えに、不利な和平協定を結んだうえ、六百人の騎士は人質として抑留され残りの兵士はくびきを架せられてローマに帰還する不名誉をも受け入れた。しかし帰還後このローマ人たちは、この協定を破棄してサムニウム人を攻撃し、大打撃を与えた。このケースをめぐるマキアヴェッリは、先の『君主論』からの引用とまったく同様のことを、次のように言う。

「無理やりに誓わせられた約束は、これを守らなくても、けっして破廉恥なこととはならない、ということだ。つまり、国家に関する約束ごとを強要されて結んだ場合は、どんな時でも、その圧力が弱まりさえすれば、これを破棄すべきである。そして、その履行に忠実でなくても、何の恥にもならないのである。歴史を読めば、いたる所にその実例があふれている。」（第3巻42章）

「歴史を読めば」が、リウィウス等古代史の本を指すことは、明らかであろう。マキアヴェッリは『ディスコルシ』のこの第3巻42章の末尾で、上述した『君主論』第18章を指して、「右のような約束違反がほめられるべきことか否か、さらには君主がそのような違約をやってよいものか否か、という点については、私の著書『君主論』で十分に論じておいたので、こ

ここではそれ以上は述べないこととする」と述べている。マキアヴェッリ自身が、この問題をめぐって『君主論』と『ディスコルシ』に密接な連関があることを証言しているのだ。これらの点でここからも、『ディスコルシ』に描かれた歴史上のリーダーたちの行為が『君主論』の君主の採るべき態度の模範とされていることが分かる。

ローマ人のこの協定破棄事件に関して、マキアヴェッリは『ディスコルシ』第 3 巻 41 章でも次のように述べる、

「ひたすらに祖国の存否を賭して事を決する場合、それが正当であろうと、道に外れていようと、思いやりに溢れていようと、冷酷無残であろうと、また称讃に値しようと、破廉恥なことであろうと、一切そんなことを考慮に入れる必要はないからだ。そんなことよりも、あらゆる思惑を捨て去って、祖国の運命を救い、その自由を維持しうる手だてを徹底して追求しなければならない」

と。これも、「勝つためには手段を選ばず」のマキアヴェッリスト的な箇所である。しかしその目的とは、「祖国の存否を賭して事を決する場合」という例外的なものだ。約束を破ってよいのは、こういう〈国の大事〉級の場合だけなのだ。

マキアヴェッリが書いていることは実は、条件付きであり、しかも非常の事態を処するための例外的処方箋としてある。安易に一般化してはならないのだ。これが『君主論』にも妥当すること、先に見たとおりである。

俗流のマキアヴェッリ解説中には、ここでの「祖国」を「自社」に置き換え、会社のリーダーたちは自社を「どのような手だてを使ってでも、護持されなければならない」と読めるとするものがある。これは、三重に間違っている。第一に、マキアヴェッリがマキアヴェッリズムを論じているのは、国家護持に関してである。かれにとって、国家内の諸団体である、政治団体や利益団体、とりわけ企業が、国家の法や道徳に反してマキアヴェッリズムで振る舞うようなことは、問題外であるばかりか、国家統一を

めざす立場からして許されない。第二に、国家においてさえ、上述のような例外的な危機状況への対応策としてある。第三に、今日では、古代やマキアヴェッリの時代とは異なり、道徳に反した行為は許容されない。今日では道徳上の潔癖主義が、政治においても支配的である。マキアヴェッリズムを経営上の戦術として「超応用」するのはその論者の勝手だが、マキアヴェッリの名を借りて説くのは、「超解釈」すぎる。

上にも出てきた、『君主論』第18・19章の有名な「ライオンと狐」のたとえについて、ここで考えておこう。人びとは今でも、これこそマキアヴェッリが「悪の教師」であることの証拠だとしている。「ライオンは人を無差別に喰い、狐は人を騙しまわる；マキアヴェッリは君主に、そうした暴力と欺瞞を奨励しているのだ」と。しかし、本当にそうだろうか。そして『君主論』のこの言明は、『ディスコルシ』とどう関係するか。かれの言うところを聞こう。

「半人半獣が家庭教師になったというのは、君主たるものは、このような二つの性質を使い分けることが必要なのだ。どちらか一方が欠けても君位を長くは保ちえない、そう教えているわけだ。

そこで君主は、野獣の気性を適切に学ぶ必要があるのだが、このばあい、野獣のなかでも、狐とライオンに学ぶようにしなければならない。理由は、ライオンは策略の罠から身を守れないからである。罠を見抜くという意味では、狐でなくてはならないし、狼どものどぎもを抜くという面では、ライオンでなければならない。といっても、ただライオンにあぐらをかくような連中は、この道理がよくわかっていない。」（第18章）

引用文をよく読めば分かるように、ここではライオンは——人を襲う残虐性にはなく——悪いオオカミを抑える警察力・軍事力、それらに支えられた威嚇力に関わり、狐は——人をだまして喜ぶことにではなく——敵のワナを賢く見抜き、危険を機敏に察知することに関わっている。したがってマキアヴェッリの「ライオンと狐」は、不道徳の勧めではない。

それどころか、これは古来、統治者が心がけてきたことである。現代の国家も、犯罪予防のために、一方の軍事力・警察力・刑法（ライオン）と、他方の諜報機関・ブレイン（狐）とを整備するというかたちで、「ライオンと狐」を心がけている。すなわち引用箇所は、君主が、国内の統合と軍事とのために、実力と情報網・知恵とを併せもつ、古代以来のすぐれたリーダーたちのようにあるべきだという、ごく自然なメッセージである。

しかも「ライオンと狐」は、軍事リーダーの姿そのものでもある。智将は、武力・威嚇力（ライオン）と情報網・合理的判断・策略（狐）とで敵を打倒するのである。プルタルコス『英雄伝』には「ライオンと狐」のテーマがいくつか出てくるが、ここで「狐」とはこの智将⁽⁵⁾を指す。そして先に見たように、マキアヴェッリは「君主は、戦いと軍事組織と訓練」に専心すべきだと言っていた（『君主論』第14章）。だとすれば君主が「ライオンと狐」であるとは、君主がすぐれた軍事リーダーとしてあるということをやによりも意味している。

筆者がこれまでも指摘してきたように、そもそも西洋では狐は、第一義的には賢い動物であって、日本での狐のように、誰彼となくだます陰険な動物、ないし妖術を使って化けたり人に憑いたりする動物、ではない。西洋で狐は、しばしば銀行のマスコットになるほどの、「賢さ」の象徴として、プラスの存在である⁽⁶⁾。賢いがゆえに様々な策略をも使うから、その意味では「ずる賢い」(cunning)にも関わり、その観点から西洋でも古来から狐は批判的に描かれることはある。しかし策略は即、悪ではなく、敵に対する策略は善であり正義に反しないとされてきたのだ（知恵⁽⁷⁾というものの自体が、そういうものである）。

(5) 現代でも、第二次世界大戦の北アフリカ戦線で戦功を積んで神話化された、ドイツのロンメル (Erwin Rommel) 将軍は、智将としてのその才能を讃えて「砂漠の狐」(desert fox) と呼ばれた。

(6) 1300年代後半にイギリスで書かれたとされるアーサー王伝説の書『ガウェイン卿と緑の騎士』(Sir Gawain and the Green Knight) の第3巻で、第3日目に城館の主人が狩りの対象としたのは、賢い動物としての狐であった。

したがって、マキアヴェッリの「ライオンと狐」の言明は、130年後のホップズの「人間は人間に対してオオカミである」(homo homini lupus)の言明とは異質のものである。ホップズの場合、人間は強い自己愛(エゴイズム)のため、相互に暴力をふるい約束を破る。「オオカミ」とは、この本性としての暴力と欺瞞を意味している。これは、明らかに性悪論である(ここで性悪論とは、人間をエゴイズム、欺瞞や残虐さ、怠惰の存在と見る人間観であり、西洋で言う「悲観的人間観」のことである)。これに対しマキアヴェッリの「狐」は、そういうこととは無関係である。性悪論とも関係ない。「狐」は、このオオカミのワナを見破り、策略で倒す賢さに関わる。130年も時を異にするマキアヴェッリとホップズを直結させるのは——内外の政治学の教科書等によく見られるが——アナクロニズムである。

xi) 『君主論』第19章でマキアヴェッリは、君主が勇気のある、きつぱりとした態度でいくことの重要性を説く。それこそが、軽蔑されないための条件だ、と。

「いっぽう軽蔑されるのは、君主が気が変わりやすく、軽薄で、女性的で、臆病で、決断力がないとみられるためである。このことは、君主は一つの暗礁と受けとめて、大いに警戒しなくてはいけない。と同時に、自分の行動のなかに偉大さや、勇猛心、重厚さ、剛直さなどが窺えるように、努力しなくてはならない。」

こうした決断力がある君主は誰が模範かは、ここでは語られていない。しかし実はこのテーマは『ディスコルシ』で、古代ローマの断固とした態度と、マキアヴェッリの時代のフィレンツェ人に見られる優柔不断との対比において詳論されているところである。

(7) 西洋で貪欲ゆえに、また困らせる悪い目的のために人をだますのは、『イソップ』や『赤ずきんちゃん』にあるように、オオカミである。キリスト教でも、オオカミは神の子であるヒツジを食べるので、悪魔だとされた(これに対し日本ではオオカミは逆に、害獣の鹿やウサギを食べてくれる神、大神だった)。

「このような処置の中に、ローマ元老院の賢明さと慎重さが現われているように思われる。元老院は〔…〕日常の習慣や、自分たちが以前に下したことのある決定とはすっかり違った方針でも、必要とあらば、ためらわずにやっていた。〔…〕弱体な国家が持つ一番悪い傾向は、〔このローマ元老院とは反対に〕決断力に乏しいということだ。それらの国家が打ち出す政策は全部、追い込まれてやむをえず採用したものである。」(第1巻38章)

「私は物事をあいまいにしておくことが国家活動にとって害毒を流すものであり、わがフィレンツェ共和国に災厄と屈辱を与えてきたことを、幾度となく思い知らされてきた。きわめて難しい問題で、しかも〔英断をもって〕これを決定しなければならない時に、優柔不断な人物がこれを評議して決定を下せば、必ずといってよいほどあいまいな結論しか出てこないものである。」(第2巻15章)

このように『ディスコルシ』の記述を踏まえれば、古代ローマのリーダーたちの決断力がマキアヴェッリを深く印象付けたこと、かれらの決然さが『君主論』第19章を書くときにも念頭にあったこと、が分かる。

xii) 『君主論』第20章の城塞論はどうか。

「もし最上の要塞があるとすれば、それは民衆の憎しみを買わないことにつきる。なぜなら、どんな城を構えてみても、民衆の憎しみを買っては、城があなたを救ってはくれない。民衆が蜂起すれば、きまって民衆を支援する外国勢力がやってくるものだ。現代にあつて、城塞が君主に役立った事例は見当らない。」

マキアヴェッリは、「現代にあつて、城塞が君主に役立った事例は見当らない」と言う。それは、君主の座を固めるうえで決定的に重要なのが、善政を通じて民衆の心をつかむことだったからである。民衆に反感をもたれると、堅固な城塞があつても君主は安泰ではない、と。こういう言明も、かれの素直な道德感情の表出である。ここでも『君主論』は、まじめな道德論の本としてもあるのだ。先入観を取り去ってマキアヴェッリを読むと

きにだけ、このことが見えてくる。「あの陰險な人物が素直な道德論を出すわけがない」とか、「マキアヴェッリの素直なそぶりの裏には、何かがあるはずだ」とかといった警戒心は、必要ない。マキアヴェッリの言明は、そのまま受け止めて問題ないのだ。そうした箇所を、本稿はすでに数多く確認してきたのだから。

『ディスコルシ』第2巻24章は、この『君主論』第20章と同内容である。ここでマキアヴェッリは、城塞があると、君主は民衆が反乱しても安心だと考えて善政を怠り、そのためかえって転覆されるケースが多くなる、と言う。

「したがって、先の見通しの利く優れた君主は、自分自身が立派な統治の実をあげていくためにも、さらには自分の息子たちにみじめな行く末におちいるようなきっかけを与えないためにも、決して城塞を構築するような真似はしないはずだ。こうしておけば、支配者は人民の善意だけをよりどころとするようになる。そして、城塞をあてにするようなことはなくなる。」(第2巻24章)

そしてこの問題もまた、マキアヴェッリが古代ローマ人から学んだところだった。「ところがローマ人きたら、今日の間とはまったく異なる力量、判断力、その他の力を具えた人びとであったから、城塞を造ろうなどとは思ってもよらなかったのである。ローマはその自由を享受し、昔ながらの制度と、すぐれた法律を持ち続けていたので、彼らは都市や地方を維持していくための城塞を構築しようとはしなかった」(第2巻24章)、と。古代ローマ人のリーダーたちは、市民の共同体的結束力と、武装した市民軍の力とを信頼していたので、また周辺の地の人びとを善政によって味方に付けていたので、城塞などに頼ろうとはしなかった。『君主論』の君主も、このような古代ローマ人にこそ学ぶべきだ、ということである。

xiii) 『君主論』第21章が出している、煮え切らない中立政策で時を稼ごうとするのは国を失う原因だ、という命題については、どうだろう。こ

れが問題となのは、ともに強い国である A 国と B 国が戦争しているときである。ここでは弱い C 国は、A 国、B 国のどちらかについたうえて、その国のために果敢に闘う必要がある、とマキアヴェッリは言う。それは、次のような計算による。

「これとは逆に、君主によっては、勇敢に一人の人物の側に立つと旗幟を鮮明にする。このばあいでは、もし加勢したほうが勝利を握れば、勝利者がどんなに強力で、彼の意志のままにあなたが操られたとしても、彼はあなたに恩義を感じる。そして友情の絆で結ばれる。それに人間は、そこまであなたを虐げて、恩知らずの見本になるほど、不実なものでもない。そもそも勝利をつかんだといっても、勝者がなんの気遣いもせず、まして正義に関する配慮もなく、それですむような完璧な勝利などありえない。」

A 国が勝てば、A 国は C 国に恩義を感じてくれる。B 国が勝っても、完全制覇はないものだから、あとで C 国をも攻撃しに来るといようなことはない。負けた A 国も、恩義を感じえ戦後もいろいろ C 国に配慮してくれる。これに対して中立であれば、戦後は A 国と B 国のどちらからでも、「C 国は支援してくれなかった」として信頼されず反感をもたれるから、C 国はいずれはどちらかの国から攻撃を受け、しかも他方の国からの援軍を期待できないから、孤独のまま破滅に向かう、と。このようにして破滅に向かったのが、マキアヴェッリによればフィレンツェだった。

『ディスコルシ』第2巻15章は、この『君主論』第21章に対応している。ここでマキアヴェッリは、シュラクサイが二つの大国、カルタゴとローマの間であって、どちらに付くか逡巡した史実をめぐって、どちらかに与する態度決定こそが大切だった、と指摘する。

「つまり、このように煮えきらない状態でいれば、共和国の崩壊は目に見えているからだ。むしろ、どちらの側につくにしろ、その選択をはっきり決めておきさえすれば、そこから何らかの明かるい見通しも生まれてくようというものだ、と〔シュラクサイの最高指導者が名演説で〕主張したのである。

ティトウス・リウィウスがこのいきさつを述べた記述ほど、逡巡遲疑があたえる害毒を見事にえぐり出したものは、彼の著作のどこを繰っても見当たらない。」

ここでマキアヴェッリははっきり、リウィウスの記述が自分に深い印象を残したと証言している。前述のようにマキアヴェッリは決断力があることを重視する人であるが、その根底には、古代のリーダーたちの姿勢や、かれらを描く歴史家たちの示す史実が大きく作用している。この古代人を念頭に置いてマキアヴェッリは、『君主論』においても決断力を重視するスタンスを出しているのである。

xiv) 『君主論』第24章は、これまでの議論を総括した章だ。ここでマキアヴェッリは、君主が軍事力を充実させること、善政で民衆の模範となつてかれらを味方につけること、および法律・法制度を整えること、の重要性を説く。

「新君主が新しい国を築き、よい法律とよい軍隊とよい模範とで国を飾り、強くすれば、その栄光は二重に輝くことであろう。」

法律と軍隊と善政とが君主に欠かせないということは、通俗的なマキアヴェッリ・イメージとは異なるが、先にも見たようにマキアヴェッリがしばしば強調することである。

『ディスコルシ』第3巻1章は、この『君主論』第24章に対応している。ここも同じかたちで、この法律とすぐれた君主とがもつ、民衆を有徳なものへと感化する力を論じる。

「何らかの秩序のもとに共同生活を営む人びとは、外部の事件の刺激のためか、あるいは自発的な意志によるかは別として、自分自身を掘り下げて考えるようになってくる。[...] 法律はしばしば、団体の中にある人間に、自分たちを見つけ直す機会をもたらす。あるいは、まさに市民の中から傑出した人物が出て、自ら手本を示すだけでなく、その立派な行動によって一般市民を教化し、法律と同じ効果を与えるのである。」

民衆は、善い制度と徳性の高い人物とに服する社会で生活することによって自然と道徳性を高める、という立場が鮮明である。これは、西洋でも東洋でも古代から続いている、後述するところの「徳倫理学 (Virtue Ethics)」の思考である。マキアヴェッリはこの関連で、法律・法制度を重視して善い共同体をつくった民として、古代ローマ人を高く評価する。

「英雄的な偉業は正しい教育のたまものであり、正しい教育はよき法律から生まれる。〔ローマでは〕 そのよき法律は、多くの人が考えちがいで非難している、あの内紛に由来しているからである。」(第 1 卷 4 章)

「ここで我々は、当時のローマがいかに完全で、人民がいかにすばらしい良識をそなえていたかが了解できる。」(第 3 卷 8 章)

君主は、古代ローマ人の政治・軍事の仕方を模範にして統治すべきだと、言うのである。

他方、上にある「りっぱな軍隊」の中身は、市民軍を編成し、それに訓練を施し規律遵守を徹底させることによって可能となる。『君主論』第 12・13 章が強調するように、外国の軍隊や傭兵は、危険であり信頼できないし自軍向けに訓練することも不可能なので、君主はそれを用いるべきではない。このメッセージも、古代のスパルタやローマ共和国の経験、さらにはシュラクサイの僭主ヒエロンの政策を手本としてのものである。

そしてこれも、『ディスコルシ』第 2 卷 20 章が説くところとまったく同じである。マキアヴェッリはここでも、ローマ人やカルタゴ人らの経験を踏まえて傭兵の危険を説く。その際かれは、「私がこれまで論じてきた他のテーマについてもそうであるが、本章の論題の裏付けとなるような古代の実例に対しては、現代の連中ときたらいっこうに心を動かさない」と、同時代の人びとが古代からの警告に対し聞く耳をもたないことを嘆いている。

xv) 『君主論』第 25 章は、マキアヴェッリの運命論が出ている箇所として有名である。かれの運命論は、大別して次の三つの論点から成る。

xv-1) 先を読んで備える マキアヴェッリは、「運命は人間の行動に

どれほどの力をもつか、運命にはどう抵抗したらよいか」を考える。かれは、人間に対する「運命と神の支配」を認めるし、運命はきまぐれだともする。しかしかれは、運命は破壊的な川に似ていると言う。洪水が起ること、その時には被害が発生することは止められない。しかしあらかじめ堤防や堰を設けておれば、ある程度はその害を減らせる。これと同様、運命の支配や気まぐれに対しても、あらかじめ準備をし抵抗力をつけておれば、ある程度はその支配を弱めることができる、と。これがマキアヴェッリの運命論の、第一番目の論点である。

この考え方はしばしば、科学によって予測し、それにもとづいて自然をコントロールしようとするものであり、「近代の合理的・主体的な精神を体現したマキアヴェッリの独創だ」とされてきた。しかしこれは、思想史の知が欠けているところに出てくる見方である。なぜなら運命に対するこのような姿勢は、古今東西、軍事や政治においてごく常識であったところの、「先を読んでいざという時のために備える」賢明さに属するものだからである。西洋の古代以来の君主鑑や東洋の儒教が君主に求めてきた「賢明な君主たれ」の議論は、この賢明さを柱とする。

たとえばギリシャの軍学者オナサンドロス、『指揮官』4-5、32-10で、指揮官を船長にたとえ、「注意深い船長は、港において自分の船を徹底的にチェックし、船のメンテナンスと、航海の準備に努める。そしていったん海に出れば、運命に身を委ねつつ航海」するものの、もし嵐に襲われたら「その状況にもっとも適した対策を尽くして運命の偶然に対抗する」、と言っている。先を予見して備え、それに依拠してできる限り運命に抵抗する姿勢、「人事を尽くして天命を待つ」の精神である。

以上のことは、マキアヴェッリが『君主論』の他の箇所でも、「賢明な君主」について次のように言っていることとも照応している。

「名君は、たんに目先の不和だけでなく、遠い将来の不和についても心をくばるべきである。あらゆる努力を傾けて将来の紛争に備えておくべきだ。危害というものは、遠くから予知していれば対策をたてやすい。」（第3章）

「聡明な君主は、こうした態度をこそ守るべきである。平時にあっても、断じて安逸をむさぼることなく、この心がけを金科玉条として励み、逆境に立ったばあいにも、十分に生かせるようにしなくてはいけない。たとえ、運命が一変してしまったときでも、運命に耐えられる心構えがなくてはならない。」(第14章)

すなわち、賢明な君主は、軍事的・政治的危機をあらかじめ想定して、それに対する備えをし、それに定礎して逆境に立ち向かうものなのである。

こうしたかたちで先を読んでそれに備える賢明さの徳性は、古代以来重視されてきた四元徳の一つとしてある(四元徳は、賢明さ *prudentia*・正義 *iustitia*・勇気 *fortitudo*・自制 *temperantia* (不動心 *constantia* とも言う) から成る。西洋ではこれが、ホメロス、ヘシオドス以来、現代にいたるまで重視されてきた)。先にも見たように『君主論』第14章は、古代のリーダーたちをモデルにすべきことを強調した章であり、上のことはその関連で言われているのだ。

その際、必要な備えとしては、君主が日頃から、道徳性の高さや善政(とくにすぐれた経世策)によって民衆や同盟国の心をしっかりつかんでいることだと、マキアヴェッリは強調する(『君主論』第3・14章以外に、第9・10・25章にもある)。まさに、「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」(『甲陽軍鑑』品第39)である。君主がこれらによって内部を固め、他国の支持を得、加えて強力な軍隊・堅固な城塞・十分な食糧の備えを怠らなければ、運命が急変しても、ある程度は抵抗できる。このときには君主は、運命の支配に対して相当な自由を獲得していることになる。

『ディスコルシ』においても、先を読んで備える姿勢が前面に出ている。たとえば第1巻39章でマキアヴェッリは、過去から学んだ対策でもって、将来起こることに備えておくことが大切だと言う。

「過去や現在の出来事を考えあわせる人にとって、すべての都市や人民の間

で見られるように、人びとの欲望や性分は、いつの時代でも同じものだということが、たやすく理解できる。したがって、過去の事情を丹念に検討しようとする人びとにとっては、どんな国家でもその将来に起こりそうなことを予見して、古代の人びとに用いられた打開策を適用するのはたやすいことである。また、ぴったりの先例がなくても、その事件に似たような先例から新手の方策を打ち出すこともできないことではない。」

過去に学ぶ者は、その知によって未来を予想し、それに備え、また先例によって局面を打開できる。マキアヴェッリがこの考えをもてたのは、上にあるように、時と場所が変わっても「人びとの欲望や性分は、いつの時代でも同じ」だと見ていたからである。⁽⁸⁾

第1巻52章でもマキアヴェッリは、「さて人は、これからどの進路を選んで進むにしろ、それぞれの進路がはらんでいる欠陥や危険をよく検討しておかなくてはならない。そうして、長所よりも短所のほうが大きいようならば、これを避けるべきだ」と、先を読んでそのプラス・マイナスを予見し、必要な対策をあらかじめ考えておくことを勧める。

先を読んでそれに備えるこの賢明の徳を発揮したのは、ここでも古代ローマ人であった。かれらは、いざというときに備えて日頃から体制を整えていた。「ローマのように、ある都市国家が武装され、組織が整い、また日夜、市民が公私を問わず、各自の持つ力量と、運命の力とを十分に発揮できる機会が与えられているとすると、どんな時勢になっても、その都市の市民は常に変わらぬ精神力を持ち、威厳を保持しうることであろう。これに反して、もし市民が武装されていなければ、換言すれば、自分の力量に頼ろうとせずに烈しい運命の波にただ身をまかせるのであれば、運命の移り変わりにつれて動揺するだろう。」（第3巻31章）と。

(8) 多くの政治思想史学者たちが言うようには、ルネサンス期の性悪論的人間観なるものがマキアヴェッリを規定しているのではないこと、およびマキアヴェッリが（ルネサンス期にはもはや伝統理論が妥当しない）などと考えていたのではないことは、ここからも分かる。

以上のようにマキアヴェッリのこの運命論は、古代的でもある思考によっている。このようなマキアヴェッリについて、かれのこうした伝統的な思考・常識との連関を知らないため、「マキアヴェッリには近代人の主体性が顕著である」などと位置付けて片付けてきたところに、これまでのマキアヴェッリ研究の問題性が凝縮している。

xv-2) 運命の変化に即応する 運命の女神は、不断に回転する車輪を手にしてしている。これをマキアヴェッリは、「全面的に運命に依存してしまう君主は、運命が変われば滅びる」(『君主論』第25章) ことの意だと理解する。それゆえ、状況ごとに行為態様を柔軟に換えていくことが大切だ、と。これが、かれの運命論の第二番目の論点である。

「それゆえ、運命の風向きと事態の変化の命じるがままに、変幻自在の心がまえをもつ必要がある。そして前述したとおり、なるべくならばよいことから離れずに、必要にせまられれば、悪に踏みこんでいくことも心得ておかなければならない。」(第18章)

「運命は変化するものである。人が自己流のやり方にこだわれば、運命と人の行き方が合致するばあいは成功するが、しないばあいは、不幸な目をみる。」(第25章)

この姿勢も、『ディスコルシ』に見られる。『ディスコルシ』では、この問題自体に1章が宛てられている。「いつも幸運に恵まれたければ時代とともに自分を変えなければならない」と題した第3巻9章がそれである。ここでは次の2例が挙げられている。

①ハンニバルがイタリアに侵入した第2次ポエニ戦争において、ファビウス＝マクシムスは持久戦法でハンニバルを苦しめた。しかしローマも疲弊したため別の作戦(スキピオが提起した、カルタゴの町を攻撃する作戦)を必要とするような段階に至っても、ファビウスはその戦法を変えなかった。そこでローマ市民は、ファビウスを捨てスキピオに乗り換えた。こうしてローマは、ハンニバルをイタリアから除き、かつカルタゴを滅ぼしえ

た。この点で古代ローマ人は、「運命の風向きと事態の変化とに従う」柔軟思考の手本としてある。

②ピエロ＝ソデリーニ（1502年から10年間、フィレンツェの終身統領であった）は、共和国の立ち上がりの時期には、人間味と忍耐によってフィレンツェをまとめ上げることに成功した。しかしやがて時が移り、共和国内で「忍耐も謙虚もかえりみられない」状況が広まった。それなのに、かれは相変わらず人間味と忍耐に固執し続け、失脚することとなった。この点でソデリーニは、反面教師として挙げられている。

『ディスコルシ』には、他にも「共和国が自由を維持していくためには、絶えず時代に即応した法律制度を編み出していかなければならない」（第3巻49章）とか、「すでに指摘しておいた通り、大都市は毎日のように医師を手をどうしても必要とする緊急事態が持ち上がるものである。その病状が重ければ重いほど、より優れた人物が出て、これにあたらなければならない」（第3巻49章）とかと、柔軟思考を説いた箇所がある。

xv-3) 運命に毅然と立ち向かう マキアヴェッリは『君主論』第25章で、運命を女性にたとえ、若者のように「制服してやろう」との意気込みで力強く立ち向かうべきだと説く。これがマキアヴェッリの運命論の、第3番目の論点である。

「人は、慎重であるよりは、むしろ果断に進むほうがよい。なぜなら、運命は女神だから、彼女を征服しようとするれば、打ちのめし、突きとばす必要がある。運命は、冷静な行き方をする人より、こんな人の言いなりになってくれる。要するに運命は、女性に似てつねに若者の友である。若者は思慮を欠いて、あらあらしく、いたって大胆に女を支配するものだ。」

逆境にめげない強さ・前向き姿勢の提唱である。これは、運命が人間を支配していることを前提にした上で、それでもなお果敢にそれに立ち向かう能動的精神の提唱である。

これも、『ディスコルシ』の対応した箇所と照らし合わせることで、そ

の歴史的 position が明らかになる。その箇所とは、第 3 卷 31 章「どんな運命に対してもすこしも変わらない気迫と威厳とをそなえている」である。ここでマキアヴェッリは、古代ローマ人について言う。

「[ローマ人は、] どんなみじめな運命におちいっても決して卑屈になることはなく、かといって幸福に恵まれても、決して傲りたかぶることはなかった。例えば、このことは、カンナエで敗北をこうむった直後のこと、またアンティオコスに対して勝利をおさめた直後のことが明きらかに示している。」

すなわち外部の変化に左右されない、強力な自己制御の力に支えられた態度である。

マキアヴェッリの運命論のこの論点は、その古代的内容から明らかなように、伝統的な四元徳の一つである不動心に関わっている。この徳をとりわけ重視したのは、古代ローマのエリート層に浸透したストア哲学であった。そして近世に入ると、この徳がネオ=ストア派のリプシウス (Justus Lipsius, 1547-1606年) たちによって再評価され、セルフ=コントロール、紀律の精神として、近代ヨーロッパのエリート官僚・軍人の人格形成の核になっていった。まず、オランダ軍が改革され、それをモデルにしてプロイセン軍やスウェーデン軍、フランス軍、そしてそれぞれの官僚組織、市民生活が精神的にも近代化されていったのである。

逆境に果敢に挑戦しようとするこの資質はまた、四元徳中の勇氣にも関わる。

こうしてこの第 3 点も、伝統思想の表明であることが明らかだ。「人間が科学によって運命を支配する」などといった、近代人の主体性なるものからの運命論ではないのだ。

以上、マキアヴェッリの運命論を要するに、『君主論』と『ディスコルシ』を貫くかたちで、次の三つが核となっている。運命は、人間を手玉に取るもの、かつ人間の認識能力が及ばない超越的なもの、とされている。

しかもそれは、変転極まりないものである。しかし、この運命に対しても人間には一定の能動性が可能である。①先を読み変化をとらえる賢明、②運命に左右されない不動心、③逆境に挑戦する勇氣、④内外の人びとと相互に信頼しあえる関係をもたらしめるための正義にしっかり定礎して、立ち向かう道である。すなわちマキアヴェッリの運命論を構成していたのは、これら①～④から成る、古代以来のリーダーの伝統としてある四元徳だった。

以上、『君主論』に出ている、i)～xv)で扱った15の主要メッセージは、『ディスコルシ』のそれらと重なっている。それらは、リウィウスの『ローマ建国史』を中軸にし、古代の軍事・政治上のリーダーを模範にしつつ書かれている。マキアヴェッリが古代史を勉強したことが、両著に表出しているのだ。『君主論』がここまで『ディスコルシ』と不可分だとしたら——近時の英米政治思想史学におけるように——『君主論』と『ディスコルシ』を、君主主義対共和主義とか、現実主義対理想主義とかと対立させることは、できない。『君主論』で問題になるべきは、「近代政治学の誕生」である以上に、「古代の軍事・政治のルネサンス」、古代の書物の再生としての古典主義なのだ。マキアヴェッリについてはまず、かれの知のこの裾野の広さを正当に受け止めなければならない。

それらメッセージの多くは、古代の戦争の局面、軍事に関わることから関係している。古代の軍事・政治のリーダーたちは、策略や暴力、科学的・合理的認識を——他面での道徳性の重視とともに——駆使していた。マキアヴェッリは、これらに影響を受けて、その作品において策略・暴力と、科学的・合理的認識とを前面に押し出した。ところがこれまでのマキアヴェッリ論は、マキアヴェッリがそれらを、乱世の同時代にヒントを得、またルネサンス精神を発揮して発明したかのように、論じてきた。かれを「伝統から決別した人」、「近代政治思想家」とすることが、今なお自明のこととして通用している。

以上との関連で、次の4点をここで敷衍しておこう。

第一に、マキアヴェッリの書物には、同時代人に対する批判が目立つ。こうした批判は、どこから来るか。マキアヴェッリは、リウイウスらを読み、古代の軍事・政治リーダーたちの世界に深く魅せられた。かれは、そのなかで培われた眼で、かれの時代を見た。かれが同時代人を賞讃するのは、かれらが古代の徳性を示しているかぎりでのことであり、批判するのは、かれらが古代の徳性を欠いているときである。マキアヴェッリが古代の軍事・政治から学んだことが、かれの政治思想を理解するうえで重要なのである。

第二に、上の点を前提にすれば、マキアヴェッリが政治学を革新したという点についても、再検討を要す。かれについては、「政治と道德の峻別」や「性悪論」、「ルネサンス的リアリズム」、「近代政治学（パワー＝ポリティックスの科学）の創設者」、「伝統的な美德論からの脱却」などが論じられてきた。かれの作品が、後代の人びとをそういう方向に向かわせるヒントとなった事実は、否定しえない。しかしマキアヴェッリの作品自体は、近代とは無縁の、むしろはるか昔、古代の軍事・政治のリーダーの発想、伝統的思考を踏襲したところに産み出されたものなのである。

それどころか、古代の軍事・政治の世界では、「政治と道德の区別」・「性悪論」・「リアリズム」・「パワー＝ポリティックス」は——一面において——広く見られた。そもそも戦争ないし戦術論は、古今東西を問わず、本質的にリアルにもものを見ること（対象に即して考えること。人間の弱さ・欺瞞や欲望、実利性に着目すること）を基軸にしている。加えて、古代の戦争史ないし戦術論は、マキアヴェッリズムの宝庫である。これらが相まって、戦争・政治と道德とを区別する思考が古代から発達してきた（しかしそこでは、他方では、徳性重視もまた発達していた）。だとしたら、「近代政治学の創設者」とは——実はマキアヴェッリではなく——古代のリーダーたち、ないしかれらを描いた古代の歴史家・戦術論者たちのことだった、と言うべきことになる。

同時に、この古代人は、それら、もののリアルな見方や策略・マキアヴェッリズムに一辺倒ではなかった。かれらは、それらを、伝統的な美德論・倫理学の尊重とも共存させていた。徳と道徳性とが欠けたリーダーは、兵士の崇敬を得られないからリーダーたりえない。しかし美德とマキアヴェッリズムとは、原理的に統一できるものではない。そこでかれらに必要なのは、両者間で不断にバランスをとることであった。古代人には、一つの原理から一貫した論理で考え行動すべきだという感覚はない。かれらは、矛盾にこだわることにはなかった。マキアヴェッリは、そうしたものとしての古代的世界に浸りきっていた。それゆえかれの思考には、かなりの雑居性が現出しているのである（こうした雑居性をよしとするかしないかは、読者の判断にゆだねよう）。

第三に、マキアヴェッリがどれだけ古代に深く沈潜しつつ思考しているかは、『ディスコルシ』の書き方からも分かる。『ディスコルシ』の記述は、リウィウスの歴史書に沿いつつ、そこに記されている人物や事件を取り上げて教訓を引き出し、それを章ごとに展開していく。そしてそれとの関連でかれの時代の事件をも考え、また自分の体験をも結晶化させる、という形式をとる。その際、ある章を書いているうちに、それに関連して別の論点（教訓）を喚起され、それを次の章を立てて扱うということが起こっている。このため『ディスコルシ』では、無計画に何章か連続し、関連する論点（教訓）が次々と展開されている、ということも多い。たとえば、第1巻4～8章の、平民と貴族の対立・護民官；第1巻22～24章の、ホラティウス家の事件；第1巻11～15章の、宗教；第1巻39～45章の、十人会・アッピウス；第1巻46～49章の、民衆の問題点等々である。これは、マキアヴェッリが、自分の思想から出発して、その例証としてリウィウスの歴史書中の人物や事件を選んで『ディスコルシ』を書いていったというよりも、リウィウスの歴史書を読む中で出くわした人物や事件から様々な論点（教訓）をその都度拾い出し、それを順次自分の考えと共振させつつ、かつそれによって自分の考えを深めつつ扱うかたちで書いていっ

たことを意味する。

マキアヴェッリは、古代の勉強を進める中からかなりの思想やもの見方・考え方を学び取り、自己のものとしていった。そしてそれが、その後の時代において「新しいリアリズム政治学」、「政治と道徳の分離」、「性悪論」、「作為の思想」の出現だと受け止められることになる諸作品となった。

第四に、『君主論』と『ディスコルシ』では、マキアヴェッリの政治的立場にちがいはない。上で見たように、『君主論』の主要論点のすべてが、実は『ディスコルシ』でも重要性をもっている。しかも両著は、ともに古代の政治的・軍事的リーダーの行為を今日のリーダーたちに範例として示すための作品としてある。その古代のリーダーたちは、君主であったり共和国リーダーないし共和国それ自体だったりする。これに対応して、両著において、名宛人である今日のリーダーたちも、君主であったり共和国リーダーないし共和国それ自体であったりしている。名宛人の点でも、内容・立場の点でも、大差がない。もちろん相対的に、『君主論』では君主が主たる名宛人であるが。

そもそも、45歳にもなった人物が、同時期に書いた上記 2 著で政治的立場に大きなちがいを見せているなどと考えること自体が、おかしいのである。